

FEST TOKYO
9th ANNUAL REPORT





目次

代表挨拶 p1

団体説明 p2~8

海外事業部 p9~48

新支援地選定班 p9~32

ヴィラ班 p33~48

国内フォトワーク事業部 p49~72

ワード集 p73~75

来期展望 p76~77

写真集 p78~81

代表挨拶

お忙しい中、学生国際協力 NGO FEST TOKYO の 9 期渡航報告会にお越しいただきありがとうございます。
ございます。

「向こう見ずな支援を無くす」

この思いがメンバー一人一人に受け継がれ、NGO FEST TOKYO は今年で 9 年目を迎えます。
「SDG s」「サステナビリティ」など貧困や格差、環境問題など様々な世界の問題に目が向けられ始めているいま、FEST が考える「住民主体で、現地に根差した持続的な支援」はどんな価値を持つのでしょうか。

FEST には特筆すべき姿勢があります。目指す理念への思いや、その思いを実際のプロジェクトに反映させようとする姿勢です。9 期では、国内フォトワーク事業部の啓発活動の一環である出張授業をはじめ、海外事業部では新たな支援地の選定、地域の排水溝の問題へのプロジェクトなどを行いました。過去の OBOG の方々から紡がれた支援地の新たな課題解決へ、一步を踏み出したのです。

では、今年一年間メンバーが一生懸命考えた活動をどうぞご覧ください。

9 期代表 別所梨央

団体説明

正式名称 学生国際協力 NGO FEST TOKYO

創設日 2010 年 7 月 28 日

構成員 大学生 14 人 高校生 2 人 (2019 年 10 月時点)

関係団体 学生国際協力 NGO FEST HIROSHIMA (2012 年設立)

1. 組織体制

海外事業部……………支援地への直接的な支援活動を行う。

国内ネットワーク事業部……………国内での啓発・発信活動を行う。

広報部……………主に SNS を媒体とした PR 戦略を行う。

渉外・経理部……………団体の資金調達と資金運用を行う。

2. 団体理念

Mission 最良の国際協力を探究、実行、啓発する

Vision 世界から向こう見ずな支援をなくす

Value Quest 懐疑的な探究・本質的な活動

Flexibly 柔軟な思考・最適な行動

Evenly 多様性の尊重・相補的な関係

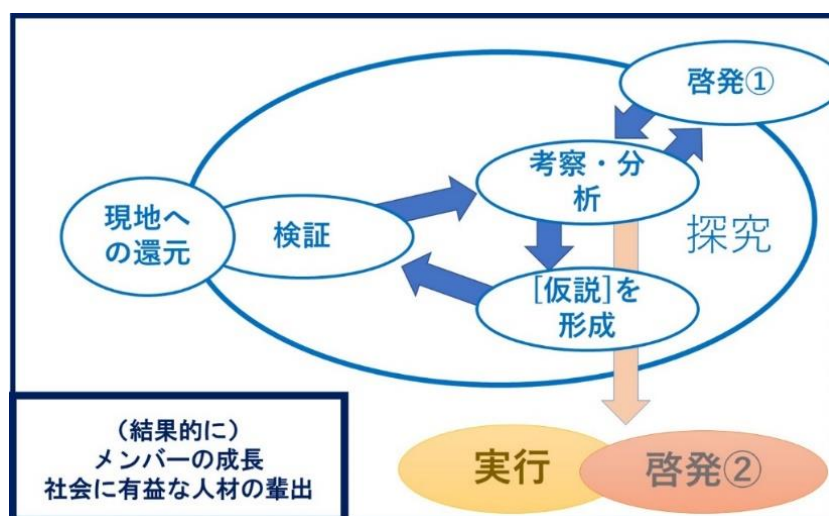
Youthfully 自発的な挑戦・将来に亘る還元

「現地のために、自立支援を行う団体」である FEST はそもそも「他の NGO の行う、現地に求められている支援ではなく、自分たちのしたい支援を行う姿勢」に問題意識を感じ、この団体が創設されたという経緯を持っている。そのような「向こう見ずな支援」をなくすために、FEST はただ現地に合わせた支援を行う NGO ではなく、より良い国際協力を探究していく NGO である。

3. 社会貢献モデル

「最良の国際協力を探究、実行、啓発する」とは、学生にできる最良の国際協力を探究するとは、現地で行った活動の経験だけでなく、国内でのミーティングや文献を読むこと、外部の方と実際に会って話すなど、様々な形が期待される。

実行するとはそういった活動の中で得た知識や経験、また各支援地の仮説から「最良の国際協力」について考察を深め、外部の方からのフィードバックを得たのちに完成した支援のモデルを実行する、ということである。啓発においては、上記のように考えられた支援モデルを外部に啓発するのみならず、国内フォトワーク事業部が社会問題や国際協力について関心の無い層までをターゲットにした啓発活動を行っている。以上の探究、実行、啓発のサイクルが「社会貢献モデル」である。



* 社会貢献モデルの図

4. 仮説思考

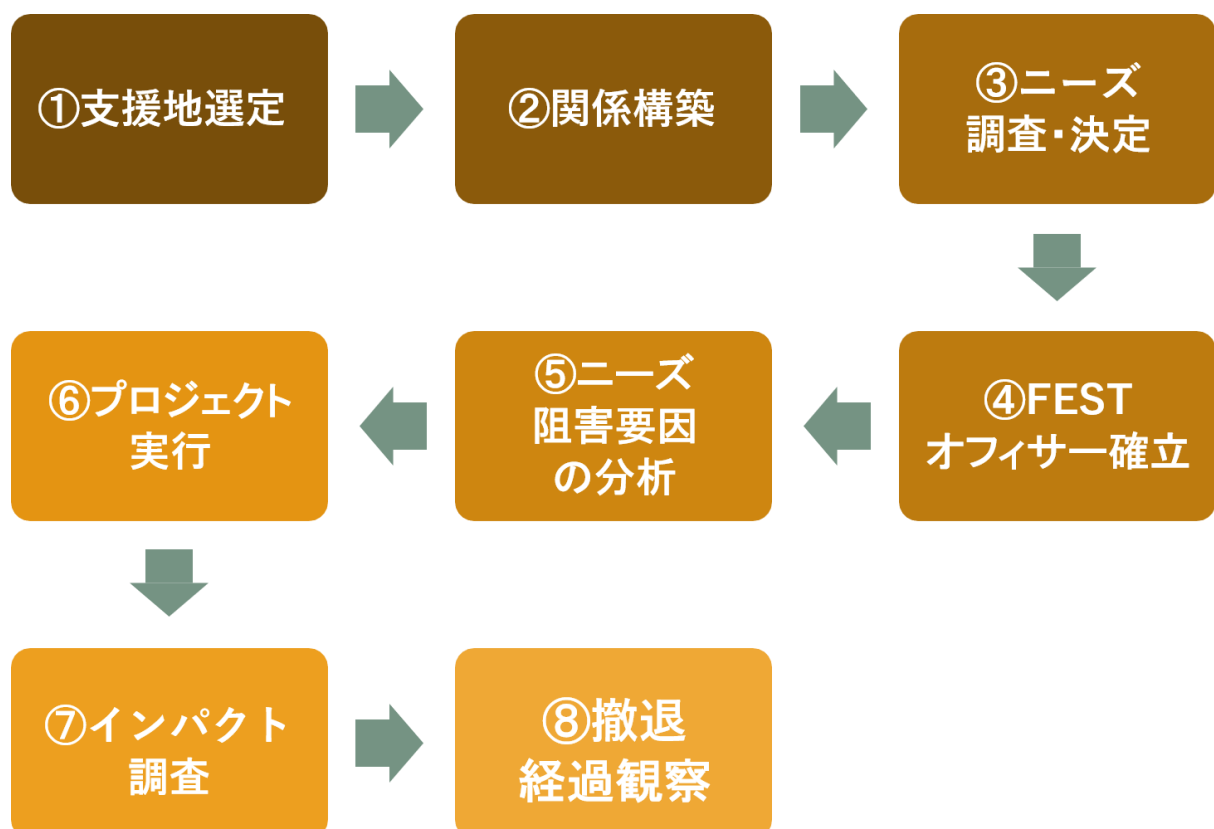
私たち FEST の支援には「仮説思考」が欠かせない。1年間で2回という限られた渡航の中で得る現地の情報を基に、スキルや知識が不十分である学生が、住民の解決したい問題(ニーズ)を把握し、またそのニーズが達成されない要因(阻害要因)に対して正確にアプローチする。このためには仮説思考を用いて、阻害要因の特定をし、さらにその支援方法も模索しつつ、支援を進める。地域の現状や問題についての情報収集だけで何年もの時間がかかってしまうが、仮説思考を用いることによって、地域の問題に対する解決方法の軸を決めることができ、より早く問題解決にあたることができる。

上記の社会貢献モデルの仮説を使用する対象として、以下の2つがある。1つ目は、「住民の阻害要因」を特定することである。そして2つ目は Mission にもあるように、阻害要因に対する最良の国

国際協力の「方法」を特定することである。このようにして、以上の2つの仮説を立て、最良の国際協力を探究、実行、啓発していく。もちろん、国際協力に一つの正解があるとは考えていない。地域や環境によってその手法は異なる。その中で学生にできる国際協力、または支援の中でも共通してこれが課題解決に向けてはより良いものがあるのではないかというスタンスで模索しているのである。

5. 主な支援の流れ

上記の理念を反映させた支援の流れとして、FESTは基本的に以下の8つのステップで行う。



①支援地選定



まず新たな支援地を選定することから始まる。現地の行政機関であるバランガイを訪問し、バランガイの管轄地域を訪問し候補地調査を行うこと、プロジェクトを実施することの許可を得る。

現地の行政機関と連携して行う理由として、FESTが提示する条件（海外事業部新支援地選定班を参照）に合う支援地を探すためには、地域についてや地域の問題・ニーズを把握している行政機関が適しているからである。

また、候補地調査における私たちの安全を確保するために、信頼のおける現地の人と行動を共にすることが重要である。

FEST の条件に合う地域をバランガイから紹介してもらい、バランガイのスタッフと共に候補地調査を行う。（調査内容は海外事業部新支援地選定班を参照）調査を行った地域の中から最も条件に合った地域を選ぶ。

②関係構築

住民との関りは信頼関係を築くところから始まる。外部の人間は、住民達に警戒されてしまい、ニーズを聞き出したり、問題の根本を引き出せない。さらに私たちの支援は住民の協力が不可欠なので、信頼関係なしには私たちの自立支援は成り立たない。

そのため、ここに何をしに来たのか、どんな支援をしようとしているのか、目的をしっかりと伝える。住民とのコミュニケーションを重ねることによって、表面的ではない、本質的なニーズや問題の構造を把握できる。



③ニーズ調査・決定



住民が抱えるニーズには、様々な問題から発生している。私たちは基本的に地域の抱える問題にアプローチしているので規模は地域レベルのニーズになる。

ニーズ調査では、口頭や紙媒体で調査をする。それぞれに調査の方法として意味があり、口頭では、質問を繰り返すなどしてニーズや問題について深く聞き出せる。紙媒体では住民が時間をかけて考えて地域の問題考えてもらう。

こうして地域の問題に改めて向き合う機会を作ることで、ニーズの根本的解決の質をあげる。そして出たニーズを基に、どのニーズにアプローチするかを住民とともに集会の形で決定し、これから行うPJを決定する。

④FEST オフィサー確立

次に決定したニーズに取り組んでもらうため、FEST オフィサーの確立を行う。この支援を通して、住民主体で問題解決を行えるようになっていくことが私たちの目標である。つまり、問題解決にあたる主役は、私たちではなく現地に住んでいる住民である。

FEST オフィサーを確立するために、住民集会などで住民によって決めてもらう。オフィサーには代表、副代表、監査、経理、の主な5つの役職がある。地域には既存の組織がある場合が多く、彼らがFEST オフィサーとなる地域もある。

FEST オフィサーは集会の進行などのプロジェクトの進行だけではなく、FEST との連絡係も務める。こうしてFEST オフィサーと連携しながら、プロジェクトの成功をサポートする。



⑤ニーズや阻害要因の分析



FEST オフィサーを立ち上げた後、ニーズや阻害要因を分析する。分析を FEST 内部で行うのとは別に、プロジェクト内容を決める前に、この作業の重要性を住民に伝え、住民内でも分析を行ってもらう。住民が将来的に自分達だけで持続的に問題解決をしてもらうためには、この問題分析は欠かすことはできない。阻害要因を根本まで洗い出せなければ、解決策も表面的になってしまうからである。

⑥プロジェクト実行

FEST は、段階的な支援の流れを行う。初めからプロジェクトを全て住民に任せるのではなく、最初は FEST も住民と一緒にプロジェクト運営する。住民のモチベーションを上げさせつつ、住民が主体的に自分たちの問題解決にあたるような環境を整備する。

前述したような阻害要因の分析のサポートや、目標の明確化、住民集会の開催の促進を FEST オフィサーや地域住民との話し合いを重ね、次のプロジェクトでは FEST がサポートしていた部分を任せ、住民主体を段階的に達成していく。

阻害要因の解決やニーズの達成には、1 つのプロジェクトだけでは十分でない場合もあり、その際は複数のプロジェクトを実施する。



⑦インパクト調査



最後にインパクト調査を行う。プロジェクトを行うことによって、どんな問題が解決されたのか、また住民はこの支援によって、阻害要因を取り除き、自分たちだけで問題解決を行うことができるようになったのか。これを評価し、次のプロジェクトに反省点や良かった点を生かす。

⑧撤退・経過観察

その後私たちは撤退する。撤退した後も経過観察として地域に入り、プロジェクトの影響や、現在地域の現状はどのようにになっているのか確認する。



FEST は私たちがいるだけの間の問題解決は目指していません。その先の、「支援団体がいなくなっても持続的に住民だけで問題解決に取り組める」

そんな環境を目指しています。

海外事業部 新支援地選定班

目次

- 1.概要
- 2.バランガイ訪問
- 3.候補地調査
- 4.候補地選定
- 5.来期展望

1. 概要

新支援地選定とは、既存の支援地に加え、海外事業部が新たに支援活動を行う地域を選ぶことである。

2019年春渡航において、2016年3月から3年間にわたり支援を行っていたアナック班が撤退した。現在海外事業部において活動しているのはヴィラ班のみである。FESTが最良の国際協力を探究・実行・啓発するためには、新たなサンプルとしての支援地の保有が不可欠であると考えた。しかし現在、新支援地選定班としては「理想として持っている支援へのイメージと実際に自分たちに出せる成果のギャップが大きい」という認識を持っている。

今までと同じアプローチ方法ではプロジェクト(以下PJ)の成果に大きな改善は期待できないという前提で、今まで支援がうまくいかなかった原因であるFEST内部の課題に、新支援地選定班のメンバー・FESTのメンバーとして着手をしようと考えている。2019年夏渡航では、新しい支援地を選ぶための調査と、FEST内部の課題解決のための情報収集を行う計画を立てた。

▽FEST内部の課題

- 今までの「FESTの反省」を活かしきれていない
 - 後輩への情報伝達不足
- 「資金」不足
- 「外部との繋がり」が薄い
 - アドバイザー(自分たちの支援についてアドバイス・フィードバック等を与える人)・他団体との交流
- 「知識・経験不足」
 - 団体としてはサンプル不足、個人としての経験不足も
- 「FESTのメンバー」が少ない、時間が無い
- 「フィリピンに滞在できる時間」に限界がある

＊ 2019夏渡航では、FEST内部の課題に対して「外部との繋がり」「知識・経験」について着手する予定であった。

「外部との繋がり」

→予定していた団体への訪問は費用的な理由で行わなかった。

「知識・経験」

→知識に関しては、予定していた読書の時間をとることが出来なかった。経験に関しては、多くのランガイへ訪問し、初めて会う多くの現地の人々と話したという点では達成と言える。



1. バランガイ訪問

バランガイで地域内での活動許可、及びその活動に対する協力を求める。また、候補地を紹介してもらう

2. 候補地調査

バランガイから提示された候補地がFESTの条件(3.-b.参照)に合うかどうかを調査する

3. 候補地絞り込み

調査を行った地域から、FESTが支援する可能性が高い候補地に地域を絞り込む

4. Cebu City Police Office訪問

絞り込んだ候補地が本当に安全かどうか正式な犯罪データをCebu City Police Officeから貰う

5. 候補地仮決定

次回渡航でより詳しい調査を行うため、支援地決定はせず、仮決定とする。



→2019年夏渡航(2019年8月6日～27日実施)

渡航中で候補地を回ることを優先させたため、候補地を絞るところまでしか進まず、Cebu City Police Officeを訪問することができなかった。結果、安全面に関するデータを取得することができず会内承認まで進ませることができなかった。候補地の絞り込みについては帰国後の活動内で行なった。

2. バランガイ訪問

- a. バランガイ訪問の目的
- b. バランガイ訪問の流れ

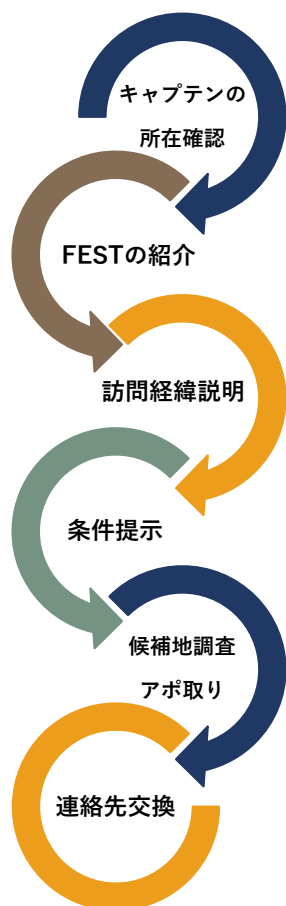
a. バランガイ訪問の目的



バランガイの首長はキャプテンと呼ばれ、私たちはまずキャプテンに候補地調査やPJの実行などにおいて許可を得る。また許可を取るだけでなく、FESTの条件に合う地域を支援するためにも、地域の問題やニーズをよく理解しているバランガイと共に協力して支援地域を探す。加えて、候補地調査において初めて訪れる地域での私たちの安全面を確保するためにもバランガイスタッフに協力してもらう。

まず候補地の調査を行う前に、調査に協力してもらうためにバランガイを訪問する。これまでは事前の連絡はせず、アポイントがない状態でバランガイを訪問していた。しかし、バランガイのキャプテンが不在のため再度訪問しなければならないなど、バランガイ訪問に多くの時間を割かなければならなかった。今回は前回の反省を生かし効率よくバランガイ訪問を行うために、渡航前にFacebookを使いバランガイへのアポイントメントを取るために連絡を試みた。しかし実際には返信がこない場合が多く現地で直接バランガイを訪問することになった。

b. バランガイ 訪問の流れ



ホテルからバランガイへまではタクシーで移動する。バランガイ到着後はキャプテンの所在を確認し、キャプテンと話することができる場合はFESTの紹介と訪問の経緯について説明する。説明の際は事前に作成したレターを用いて説明した。そしてFESTが候補地の選定において定めている条件を提示する。

▽【バランガイへ提示した条件】

- デモリッションの可能性がないこと
 - 世帯数が30～100→渡航中に40世帯以下に変更
 - 大きな犯罪がない(治安が悪くない) こと
 - 近くでタクシーが取れること
 - 平均収入が※7,000php程度であること
- ※今までの支援地の収入データから算出

FESTの条件にあった地域がある場合は、候補地調査を行うための日程を決めた。その後キャプテンや、候補地調査に同行してくれるスタッフと連絡先を交換した。キャプテンが不在の場合は再度バランガイを訪問するため、アポイントメントをとった。



今回の渡航(2019夏)では、予定より多くのバランガイが快くFESTを迎え入れてくれたこともあり、バランガイ訪問後にそのままの流れで候補地調査を行うことも多くあった。



Student International Cooperation NGO FEST

We are looking around different barangays so we will not be able to decide which area to support just from this interview. We will carefully choose the area.

We are looking for an area that satisfies these requirements below.

1. There is no risk of demolition
2. They have 40 buildings maximum
3. We can get enough Safety
4. Able to get a taxi nearby
5. Having an average income of 7000php

Please guide us to the place which fits our needs.

When visiting residents, we would like to ask you to be careful of the following points.

1. Only translate what we have said
2. Tell them we do not have much money
3. Tell them we are trying to leave as soon as possible
4. Tell them we will try our best to answer their needs
5. please DO NOT tell them our past project
6. please DO NOT lead their answers.

Thank you



Student International Cooperation NGO FEST
Wednesday, August 7, 2019

Dear Barangay Chairman
Basak San Nicolas Barangay, Cebu City

FEST is a non-governmental organization, which was established by Japanese University students in 2010. We are looking for a new area to support and we would like to ask you for a help.

We visit the Philippines twice a year in March and August and currently, we have 17 members. There are vision and mission of what our performance ought to be.

Vision: Eliminate reckless support for the underprivileged around the world

Mission: Quest, Practice, and Enlighten the best way of international cooperation

Our final goal is that the residents will be able to address any kind of problem by themselves or with government and local organizations through our supporting. We believe that they have the potential to solve the problems around them. Therefore, we do not play a key role in the project, which means residents will be a big part of our project. In couple of years, we will finalize to support them and leave from the region since we adopt "short-term withdrawal" in order to avoid resident's dependence of external support. On the other hand, we can stay here for only one month per visit, and residents have a lot of specific knowledge about the area. That is the reason why we hope them to lead the project which solves the problems in their region. We will do our best to help them to resolve their life together and improve it by giving opinions as an outsiders' point of view. The first thing we will do in a site is conducting a survey to the residents about their problems in their sitio, and then we will decide what to do. However, there are hard limits to what we can do with the residents since we are students who do not have enough budgets and long periods of time here. Under these circumstances, we would like to ask local residents and barangay hall to cooperate with us.

We had four areas we supported, which were Paray (Kasambagan, Cebu City), Pinahagbong (Subandaku, Mandaue City), Katangkongan II (Basak Pardo, Cebu City), and Anak Urban (Kinasang-an Pardo, Cebu City). We had conducted an education project with students at Cebu Technological University in order to improve the motivation for the study of the children in Paray. In Pinahagbong, we helped to build a water supply. Moreover, the residents and our members established a FUND system which consists of user fee of puso. In Katangkongan II we did several projects by using the system. In Anak Urban and participants we have done an individual business to earn some money to enrich their lives. In order to do the project there, we provided subsidy (80% of the initial cost) of each and arrange supporters for conducting businesses.

We have finished our supporting in Kinasang-an Pardo in the 2019 spring. Therefore, we are looking for new place to support around Cebu City. We would like to look around the areas in this barangay which fits our capacity. We would appreciate it if you cooperate with us.

Sincerely yours,

Student International Cooperation NGO FEST TOKYO

President

Official Website: <https://www.ngofesttokyo.com/>
Facebook: NGO FEST
Twitter: FESTmember

(↑実際にバランガイに渡したレター)

▽2019夏渡航で訪問したバランガイ

A:Barangay Subangdaku

B:Barangay Kasambagan

C:Barangay Mabolo

D:Barangay Hipodromo

E:Barangay Labangon

(ヴィラ)

F:Barangay Tisa

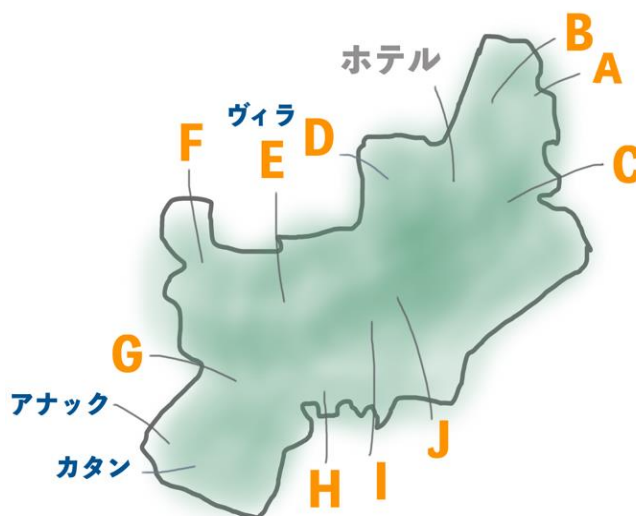
G:Barangay Basak San Nicolas

→(候補地調査は行わず)

H:Barangay Mambaling

I:Barangay Sambag I

J:Barangay Santa Cruz



2019夏渡航では以上のバランガイを訪問し、アポイントメントをうまく取ることができなかったBarangay Basak San Nicolas以外の9つ全てのバランガイで候補地調査をなった。

3. 候補地調査

- a. 候補地調査
- b. 調査内容
- c. 候補地調査での発見

a. 候補地調査



FESTから掲示した条件(参照)に基づいて、バランガイが条件を満たすと判断した地域に実際に足を運び、住民へのインタビューや地域の観察を行う。

最終的には候補地調査で得た情報をもとに、支援する地域を決定する。今回の渡航では、9つのバランガイから17の地域を紹介してもらい、調査を行った。



b. 調査内容

【聞き込み調査】

準備していた質問項目をもとに住民にインタビューを英語で行った。詳細は以下の通りである。

名前・年齢	あなたの名前は何か、おいくつですか	What is your name? How old are you?
土地	デモリッションの可能性はあるか	Is there a risk of demolition?

	★デモリッションとは？ 近年とりわけ都市部において発達が目覚ましいセブでは、住宅を取り壊して高層ビルや商業施設を建設するケースが多く見られる。その際オーナーに土地代を払っていない住民は、強制退去されてしまう。これをデモリッションと呼ぶ。	
	それはなぜか	Why? / Why not?
	★尋ねる理由 アーバンプア (urban poor) と呼ばれる体制が存在するか調べるため。アーバンプアとは、個人オーナーから政府が土地を買い取り、そこに住む地域の住民が25年間で政府に対して完済するまでローンの支払いを行うもの。この制度のもとでは強制的な退去はなされない。	
	私有地/公有地どちらなのか	Is your land private or public?
	この土地のオーナーは誰なのか	Who is the owner here?
安全面	洪水の頻度とレベル(立った時にどこまで浸かるか)	Is there a risk of flood? What is the level of the flood?
	★尋ねる理由 とりわけ雨季の降水量が非常に多いセブでは、大雨の場合洪水が起こることも少なくなく、FESTメンバーの活動中の安全を確保するため。	
	起きた場合はどう対処しているか	When it happens, what do you do?
	犯罪はあるか(どのような種類の犯罪が起こったか)	Is there any crime? What kind of crime was there recently?
連絡手段	普段どのような連絡手段を使っているか(Facebookをもっているか)	How do you contact with your neighbor?
	どのくらいの頻度で使っているか	How often do you use facebook?
	★尋ねる理由 1年の内、約1か月の渡航を2度しか行うことができないことから、FESTメンバーが日本にいる間の住民との連絡は非常に重要になるため。	
	なにを使って連絡をとるのか(スマホ、パソコン等)	What kind of electronic devices do you use?
生活水準	家の数	How many houses (structures) are there in this sitio?

	★尋ねる理由 プロジェクトを行う上で、世帯数が多く地域の規模が大きすぎた場合、地域全体を巻き込むのは難しい。地域全体で問題解決に取り組むためには、家の数を把握しておくことが必要不可欠であるため。	
	職業	What do you do for a living?
	収入	How much do you earn?
	★尋ねる理由 地域の収入を知ることは、支援をどれだけ必要としているかの緊急性を測る一つの指標となるため。	
	子どもが学校に通っているか この地域全体で何%の子供が学校に通っているのか (%で伝わらなかった場合は、具体例として90%、50%、0%など数字をだすと伝わりやすい。)	Do your kids go to school? About what percent of children(in this sitio) go to school?
協力的か	もし外部からの支援があったら受け入れるか	Do you accept support from others? The content is what you want.
	一緒にPJに参加したいか	Would you like to do a project with them if they come?
地域組織	地域組織の有無	Are there any local organizations in this community?
	★尋ねる理由 FESTとともにプロジェクトを行う際、地域組織が主に運営主体となる場合が多い。地域組織が上手く機能していることが、プロジェクトを円滑に進めるための重要な要素となるため。	
	集会を行っているか	Do you have any meeting?
	どこで行っているか	Where is the meeting held?
NGO	NGOが介入しているか	Is there any NGO supporting you?
	★尋ねる理由 FESTがプロジェクトを行おうとしても、他団体による支援が既に存在する場合、住民を混乱させることにつながってしまう。その結果、住民が望む支援とはかけ離れたものになってしまう恐れがあるため。	
	何の団体か	What is their name?

	どういう活動をしているのか	What kind of projects are they doing?
住民間関係	パーティーは行うか	Is there any party?
	定期的に行っている行事など住民間での交流などはあるか	Is there any interaction between people? How often is that?
	★尋ねる理由 プロジェクトにおいて、地域内での集金や住民同士の話し合いを必要とするケースが多い。地域内での住民関係を認知することは、それらを行う上で重要になってくるため。	
	またそれに参加しているか	Are you attending that?
ニーズ	ニーズはあるか、問題はあるか	What are your needs? Do you have a problem in this area?
	★尋ねる理由 住民がどのようなニーズを持っているのか把握し、FESTがPJを行える規模のものであるかを確認するため。	

c. 候補地調査での発見

- 家の数をたずねるときstructure、building、house等様々な尋ね方が存在したが、
 - ⇒ houseの場合、建物の数か家族の数かを問われることが多い。またどの範囲までを一つの家族ととらえるのかは住民によって異なると考えられる
 - ⇒ buildingの場合、裕福な家庭のもつ立派な建物という印象を与えると考えられる
 - ⇒ structureの場合、主に支援対象としている住民が住んでいるような規模の建物を示すと考えられる
- 我々に興味を持ってくれていた様子が伺え、FESTが支援団体ではなく調査団体であると住民に説明しても、協力的に質問に答えてもらえることが多かった
- 聞き込み調査に丁寧に対応してくれる学生が多く、プロジェクトを行う際に協力者として期待できる希望がもてた
- インタビューに熱心に答え、支援の必要性を強く訴える地域ほどデモリッションのリスクが大きく、デモリッションのリスクがあっても可能なプロジェクトを模索する必要性を感じた
- アーバンプアに地域全体で入っているケースはあまり見られなかったため、デモリッションの可能性が全くないと言える地域はほぼなく、地域内でも収入格差が存在する
- 公共の土地 (public) であっても、土地代を支払わなければデモリッションのリスクは存在する
- 収入が少ない地域ほど、ニーズが多岐に渡り明確であって支援対象になる可能性が高いが、それに比例して家の数も増え条件に合わなくなることが多い
- セブシティ全体を統括していると考えられるCity Hall(シティホール)や、各バラングイが運営するHealth Center(ヘルスセンター)で世帯数の確認ができる場合がある

4. 候補地選定

- a. 候補地条件
- b. 支援地候補

a. 候補地条件

紹介された17の地域の中から、結果的に4つの地域を残すこととした。2019年夏渡航では支援地の決定は行わないことと定めたため、支援地候補とすることが難しい地域を除外するにとどめた。以下は支援地候補を定める際に基準とした条件である。



①<u>直近のデモリッションのリスクがない</u> ・現時点で通知が来ている ・すでにそこに何かを建てる予定がある ・オーナーと居住権についてもめている 上記の場合には断念。それ以外はバランガイにも判断ができないと考えるので、上記3点をバランガイスタッフ、住民双方に確認。
②<u>洪水が頻繁におこらない、起こった際に退避可能であるか</u> 川の真横や湾岸は要検討 ・洪水のレベル ・最低出入り口が2つ以上ある 以上の項目を確認。 渡航期間(3月、8月)に起こる洪水頻度を住民・バランガイに調査する。しかし年によって異なるため、頻度における条件は設けず、回答を得てから審議する。 洪水によるメンバーの被害は、「雨が降ったら即撤退」の徹底により防ぐことができる。PJ 進行への妨げを容易に予測できるほど洪水被害がある場合は問題であるため、住民や家屋への被害の大きさも調査し判断する。
③<u>最低限の生活水準が担保されている(食糧支援といった物資支援の必要がない)</u> 最低限の生活水準を一概に定義づけることは難しいが、以下の点を重視して判断する。 ・食生活(一日に何食とるか、衛生等) ・インフラ(電気、水道、下水のほか、病院、教育機関も含む) 学生として物資支援のみの継続は難しい。また、こちらの姿勢として継続的な物資支援は行わない。物資支援から自立支援につながると考えられた場合は検討する。
④<u>日本と現地での連絡手段が確保されている</u> 帰国後、住民と直接連絡が取れることは支援をする上で必須である。 ・連絡が取れる ・英語が話せる 上記を同時に満たす住民最低2人との連絡手段を確保する。ただし、属性(家庭、性別、年齢等)の異なる住民をそれぞれ選別するよう努める。
⑤<u>FEST が支援できる規模である</u> 規模が大きすぎるために現地に全体を巻き込んだ支援が出来ないことを防ぐため。過去に支援していたアナックとカタンと呼ばれる地域の状況を踏まえ、目安は家の数が30~100 件。
⑥<u>FEST の活動に興味を持っている、協力するつもりがある</u> FESTの最終的な目標が現地のみで継続的な活動を行ってもらうことであるため、住民やバランガイの対応や反応を見て、明らかにFESTや日本人への拒否感、嫌悪感がある場合

は要検討。何人かの住民と会話をして判断する。コミュニティーが閉鎖的か否かを事前にバランガイスタッフに確認し、視察の際にトラブルが起きないように努める。
<u>⑦緊急時に安全な出入り口があるか安全な集合場所になる場所があるか</u> テロや犯罪などが起きた際に、最低限安全を確保できる道、場所を確保する。
<u>⑧NGO の介入がある</u> 自立支援をしているNGOが介入している場合、FESTのPJと被ってしまい住民に混乱を招く可能性があるのを避けるべき。FESTが取り組んでいない物資支援等を行うNGOの場合は、住民への影響を十分に考慮して検討する。
<u>⑨コミュニティーの分裂があるか</u> バランガイスタッフへの事前のヒアリングによって完全にコミュニティーの分裂を把握することは難しい。また、コミュニティーの分裂があっても度合いによっては支援できると考えている。その地域の範囲がどこまでかを住民に聞き、 ● 地域の範囲の認識が住民間で違う場合 ● 仲が悪く協力したくないと住民が言っている場合 上のいずれかに当てはまる場合は分裂がある可能性があるが、これは条件ではなく、調査項目とする。 ※分裂している場合、住民全体を巻き込んだPJを実行できないので避けるべき。
<u>⑩現地組織の有無</u> PJを円滑に行う上で、重要な事項に決定を下したり、住民同士で話し合ったりするために現地組織は必要不可欠である。
<u>⑪支援地の立地</u> ホテルから最低1km以上離れており、かつ片道30分以下で行き来出来る地域とする。住民がホテルまで来てしまうことを避け、また洪水や渋滞を考慮しこの範囲内に定めた。 Cebu city (セブシティ) 内でFESTが危険だと認識しているエリア から半径1キロメートル以内の地域は危険区域とみなし、その付近は避ける。また、警察署を訪問し犯罪件数のデータをもらい、過去の支援地と比較し、地域の安全性を確認する。

b. 支援地候補

残した地域は以下の4つである。上記の候補地を選ぶ条件に照らして、各項目の調査を行った。

1. 地域名：

St. nino a Lopez

(サントニーニョ・ア・ロペス)

バランガイ名：Labangon (ラバンゴン)



①デモリッション	可能性有り。 アーバンプアに参加している家庭と、個人のオーナーから借りているものの支払いを行っていない家庭が混在していた。
②洪水	排水溝が設置されており、洪水が起きた際は足首あたりまで水がくる。
③生活水準	● 95%の子どもたちが学校に通っている。残りの5%は親が刑務所におり、経済的な理由からいけていない。 ● 排水溝が設備されており、蓋がついていた。
④連絡手段	● Face Bookは若い人ほどよく使う。本人が使用していなくても、家族の他のメンバーが使用している。 ● 電話(携帯)
⑤家の数	87

⑥関心・意欲	インタビューは最後まで受け答えをしてくれており、頼むと地図も書いてくれた。
⑦安全性	特に犯罪があるという話は聞かなかったが、喫煙者が多く見受けられた。出入口は2つ確認している。
⑧NGOの介入	なし(学校には子供達にバックなどの学用品を支給している海外の団体があり、おそらく中国)
⑨コミュニティー	● 地域はA~Eにオーナーによって区分されているが、他の区域の住民を知っていて、話す機会はある。 ● ご近所さん(20世帯ほど)とパーティーなどを開催したりする ● 1、10月にフェスタ(現地のお祭り)を行うが、カトリックを信仰しない住民は参加していない。 ● urban poorは2006年から開始。毎週土曜日住民の家でミーティング。参加人数は20~30人ほど。
⑩現地組織	● チャペルの組織が存在し、地域のリーダーであるオフィサーは10人。 ● 1回/3週間ミーティングを行う。住民の家の中で行っており、5~10人が参加。 ● ホームオーナーズアソシエーション(homeowners association)と呼ばれる、家族の代表者1人が所属する組織には、メンバーは98人いるが実際に集まるのは30名程度 ● urban poorを申請している途中であり、デモリッションのリスクはないがまだ受理されていない。
⑪立地条件	ホテルからタクシーで20分程度
地域の問題	● 十分な食事の確保ができない ● 仕事につけず所得がない ● 親がいない子どもへのサポート不足 ● アルコール中毒者による近隣住民への迷惑 ● 排水溝に子どもが転落する事故の発生

2. 地域名:

Atis

(アティス)

バランガイ名:Sambag 1 (サンバグ ウノ)



①デモリッション	あり。Home owners association が組織されている区域 (Home owners association area) では可能性はない
②洪水	● Home owners association area ○ 洪水が起きた際はひざ下まで。 ○ 洪水が起きた場合は家の中で待機する。 ○ 排水溝の掃除を行う ● 他の地域 ○ 地域の中で比較的高い場所に家を建てているため洪水のリスクはない

③生活水準	● テレビや電子レンジ、キッチン、水道、電気などの生活インフラが整備されているため、生活レベルは高いと考えられる。 ● 1日3食とれない住民もいる
④連絡手段	携帯電話
⑤家の数	家の数は50～100ほど。住民によって答える数は異なり、再調査が必要。Home Owners Associationに加入している家庭は22
⑥関心・意欲	質問に積極的に答えてくれた
⑦安全性	● Home owner association area ○ 多少の犯罪はあるが、治安は良い。 ○ ドラッグに手を出してしまった少年少女がいたそうだが、この地域には住んでいない。また、ギャンブルもある。 ● 確認できた出入口は2つ
⑧NGOの介入	なし。過去にキャプテンが変わる前は、セブの政治関係者が入っていた。
⑨コミュニティー	● urban poor のミーティング ○ 月に1回 ○ 最近は行われていない ○ 何か話すことが出来れば集まる ○ 外の広場で行っている ● urban poorに加入している地域とその他のエリアに分かれているが、交流はあると言っていた。 ● メイン道路と奥に入った道との交流が薄い
⑩現地組織	home owners association
⑪立地条件	ホテルからタクシーで10分程度
地域の問題	● 所得が低い ● 仕事安定していない ● 働き口がない(75%の人は無職) ● 1日3食とれない日がある ● 薬を買うことができない

3.地域名:

Paradise2

(パラダイス ツー)

balanガイ名:Kasambagan
(カサンバガン)



①デモリッション	なし
②洪水	場所によって被害は違うが、膝までの洪水はある。
③生活水準	● 排水溝はない ● 学校に通えない子供達がいる。 ○ 親が刑務所にいて離れ離れ、仕事についていないなどによる資金不足が原因 ○ 近所の人たちが、ご飯をあげたり家に入れてあげたりなど助けているが、学校に通わせるほどの支援は行えていない。
④連絡手段	● 携帯

	● お年寄りFacebookをやっていない人が多いが、若い世代はやっている人が多い
⑤家の数	80 (約20は裕福な家庭であり、塀で場所が分けられている)
⑥関心・意欲	住民たちが集まってきて、明るい雰囲気インタビューに答えてくれた。
⑦安全性	● 確認できた出入口は2つ
⑧NGOの介入	なし
⑨コミュニティー	フィエスタ、クリスマス、新年、ハロウィン等、子供達のためのイベントが開かれる。 全子供が参加する。(来ないと呼びに行く)
⑩現地組織	● チャペルはあるがチャペルオフィサーはいない ● その他にも地域内の組織はなく、バランガイのwoman's organization とsenior citizenなどのグループはある(woman's organizationでは月に1回ミーティングが行われている。地域内での集会はないが、woman's organizationの集会に参加できない住民がいた場合は地域内でそれについて議論することがある)
⑪立地条件	ホテルからタクシーで20分程度
地域の問題	● 所得が低い ● 子供が学校にいけない ● 親がいない子どもが存在(親が刑務所に入ってしまった等の理由) ● 洪水が起こる ● 排水溝がない

4.地域名:

Naya village

(ナヤ ヴィレッジ)

バランガイ名:Tisa(ティサ)



※1つの地域の中に2つのエリアが存在した。村全体の内容は_____

①デモリッション	あり(直近ではリスクはないが、長期的には可能性あり)
②洪水	地域の外れは土地が下がっているため膝くらいまで水が達することがあるが、その他の地域はない。
③生活水準	● 木でできた家に住んでいた。しかし、中にはコンクリートでできた立派な家もあった。 ● 水道はないが、井戸はある。 ● 道は砂利道 ● 排水溝は簡易的なもののみ
④連絡手段	● 携帯 ● Facebookは毎日使う
⑤家の数	10 <u>50</u>
⑥関心・意欲	住民が自ら集まって、質問に答えてくれた。

⑦安全性	● 出入口は1つだが、大きな通りにそれぞれの家が面している ● 犯罪はない
⑧NGOの介入	なし
⑨コミュニティー	● 住民同士の誕生日をみんなで集まって祝っている。 ● フィエスタ、クリスマス、新年など ● 収入の大きい世帯との交流はあまりない模様
⑩現地組織	チャペルオフィサー10人程度 月に一回オフィサーのみが集まる
⑪立地条件	ホテルからタクシーで15分
地域の問題	● 働き口がない ● 所得が低い ● 学費が払えず教育を十分に受けられない ● 金銭的に医療サービスが受けられない（特にこども） ● お金がなく交通機関を利用できない

4つ以外の地域を候補地から除いた理由として、主に以下が挙げられた。

<u>デモリッションのリスクが大きい</u> 過去に、プロジェクト中にデモリッションが起こってしまい住民が他の地域へ移らなければならないことがあった。その結果、プロジェクトを中止せざるをえなくなってしまったため。デモリッションのリスクが大きいことの理由としては土地の支払いをしていない、土地の所有者を住民が把握していない、土地の所有に対して住民同士の認識が違うなどがあげられる。
<u>集会場所がない</u> プロジェクトにおいて、会議や大事な決定事項がある際は集会を行う。この集会を行う場所がなければ、プロジェクトを行うのが困難であるため。
<u>川が近くに存在する</u> 川が近くに存在する場合、洪水が起こるリスクが高まりFESTメンバーの安全を確保できないため。
<u>家の数が多すぎる</u> 地域全体を巻き込んで問題を解決しようとしても、世帯数が多すぎる場合全体へのアプローチが難しいため。（家が100件より多い場合は除外した）
<u>ニーズがない</u>

住民が問題であると認識することに関して住民主体でプロジェクトを進めていくが、ニーズがなければ住民の主体性を考慮できずプロジェクトに対するモチベーションを保つことも難しいため。

ニーズがあがらなかった理由としては、住民が現状の生活に満足しており特に問題視していることがないこと、収入が高く生活の質が高いことがあると考えた。

5. 来期展望

- a. 概要
- b. 予定の流れ
- c. 活動内容

a. 概要



今回の夏渡航では、バランガイ 訪問・候補地調査を行い、候補地を4つまで絞った。しかし、夏渡航以前に予定していた読書による知識の習得や他団体訪問は行えなかった。そこで、10期新支援地選定班では次回春渡航までに、情報収集に重きを置いていく。今までのFESTが行なってきた支援を見直し、考察しつつ、他団体訪問・資料・本による知識獲得を行うこととする。また、夏渡航の候補地調査で得た住民のニーズを元に、今できる支援のアプローチの仕方を考える。

b. 予定の流れ



c. 活動内容

情報収集

<内容>

- 読書
 - 候補地調査ででたニーズに対するアプローチの方法について
 - 住民とのコミュニケーションの取り方について
- 過去の資料
 - 過去の支援地域
 - デモリッション
 - デモリッションに対してのリロケーション(居住地移動)



- アーバンプア
- ヴィラ班
- 月末報告・報告会資料

他団体訪問

<目的>

- アドバイザーとのコネクション
- 自立支援、又はFESTと同じような活動をしている団体
- セブの現地組織との協力体制

海外事業部ヴィラ班

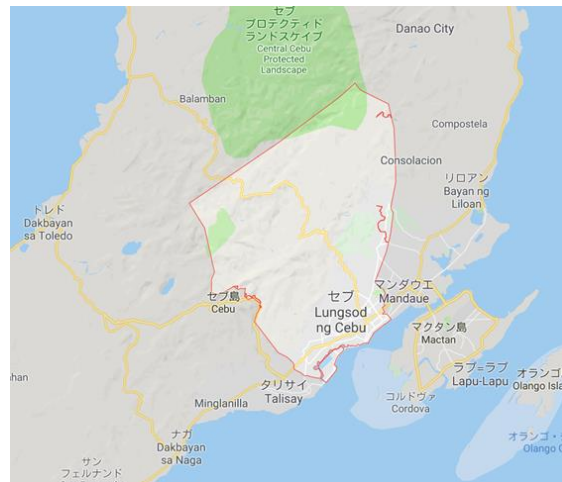
目次

1. 地域概要
2. 支援地決定に至るまで
3. 2019 年春渡航
4. 夏渡航計画
5. 2019 年夏渡航
6. 2019 年夏渡航後
7. 長期的支援計画

1. 地域の概要

バランガイ: Labangon Barangay (Cebu City)

支援地名: Villa Saceda Compound (通称ヴィラ)



今までの FEST の支援地で最少の約 25 世帯が居住しており、2019 年 3 月の春渡航から支援を開始した地域。

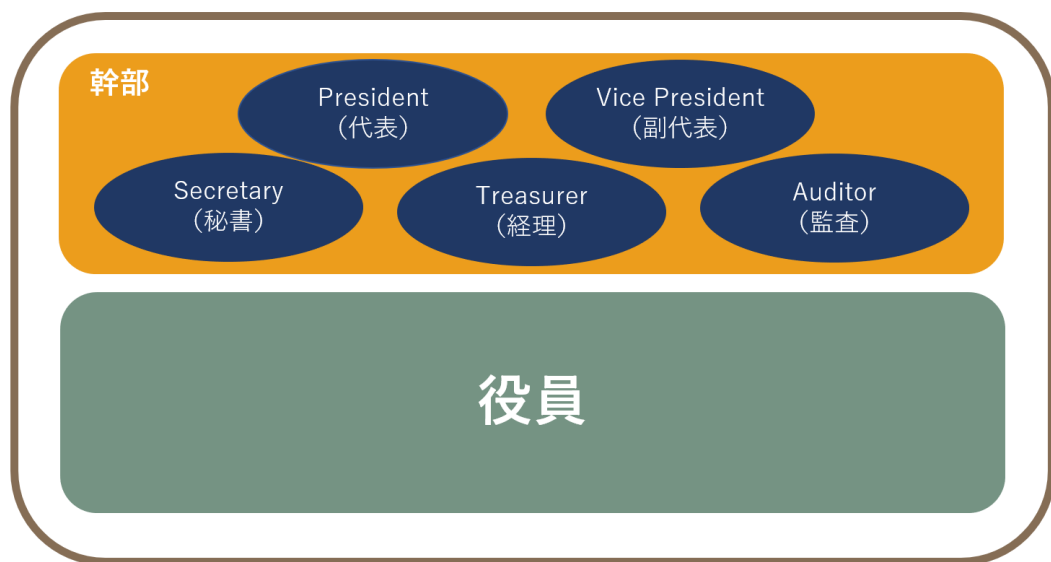


多くの住民は働いていて、平日の日中は地域内に大人があまりいないことが多い。代わりに、学校帰りの子どもが地域を駆けまわったり、手遊びをしていたりして、いつも賑やかで笑顔が絶えない

比較的新しい地域であるため、地域内には建設中の建物が 2, 3 軒あり、道は未舗装で地面が剥き出しになっている。地域のほとんどは住宅でチャペルも存在せず、渡航中に FEST が集会を開く際は住民宅の前の通路に椅子を並べ囲むような形で行った。地域内の問題として、排水溝整備、道路の舗装、ゴミ箱の設置、街灯の整備などがある。



世帯数	約 25 世帯
土地	私有地。Urban Poor の制度を利用中
生活水準	400～450（約 800～900 円）ペソ/日（大工）、300（約 600 円）ペソ/日（ドライバー）、250（約 10000 円）ペソ/日（物売り）
現地組織	あり(下図参照)
言語	現地語であるビサヤ語に加え、英語も話せる住民が大半である



5 人の幹部と 5 人の役員を中心とした地域組織「Villa Saceda Homeowners' Association」が存在、毎月 15 日の夜に集会を開催するとともに Social Housing への集金を行っている。



2. 支援地決定に至るまで

2018 年春渡航から新しい支援地選定が始動し、2018 年 4 月から 7 月の間に候補地を 2 つまで絞った。2019 年春渡航では、この 2 つの候補地から 1 つを新支援地として決定することを目標の 1 つとしていた。バランガイスタッフの同行の下、団体紹介をするとともに、前回渡航から変化した点がないか、より詳細な情報を得るために住民へ聞き込みを行った。

具体的な聞き込み項目に対する回答は以下の通り。

- ・直近のデモリッションのリスクがない
- ・最低限の生活水準が担保されている(食糧支援といった緊急支援の必要がない)
- ・日本と現地での連絡手段が確保されている(SNS のチャット機能を頻繁に利用している)
- ・FEST の活動に興味を持っている(聞き込み時に友好的である)
- ・FEST の他の支援地と比べて世帯数が支援対象として適当な規模である

これらの聞き込みの結果を踏まえて、班内・団体内で FEST の支援地として適切であると判断し、「Villa Saceda Compound」を FEST の 5 つ目の支援地として正式に決定した。

< 支援地決定から現在までの流れ >

2018.11-2019.2

新支援地決定のための調査項目を検討

2019.3(春渡航)

新支援地決定のための調査、関係構築イベント

住民へニーズ調査→排水溝整備プロジェクトに決定

2019.4-2019.7

排水溝プロジェクトのプランニング

2019.8 (夏渡航)

排水溝プロジェクトのための聞き込み

3. 2019 春渡航

(2019 年 3 月 1 日～26 日実施)

①ヴィラ住民との関係構築:イベント「おにぎりパーティー」開催



支援地で今後本格的にプロジェクトを始める以前に、「住民との良好な関係構築」は必要不可欠である。なぜならば、プロジェクトを行う際には住民からの信頼が欠かせないからである。そこで、「おにぎりパーティー」と題して、日本からいくつか具材を持参し、地域内の空きスペースで住民とおにぎりを作った。



「おにぎり」は、日本文化の 1 つであり、住民が日本文化にとっても興味を持ってくれと考え、関係構築の手段として利用した。ヴィラでの最初のイベントであるため、宣伝用チラシを各家庭に直接訪問したり 道ですれ違う子どもたちに手渡しをしたり と広報に力を入れた。

[関係構築イベント反省]

良かった点 😊	悪かった点 ☹️
地域内の住民（特に子ども）の名前や顔を覚えられた	土曜日に開催したことで、大人の参加率が低く交流が図れなかった

②ニーズ調査

私たちだけで地域の問題を特定することは、こちらの主観で判断することになりうる。その問題が住民にとって本当に問題であるかは私たちだけではわからない。

住民が地域内で問題と捉えているものを把握するために、住民自身から聞き取り調査を行った。

調査方法は、アンケート形式と口頭インタビュー形式の2つである。



アンケート配布により、地域内の住民の年齢・職業・名前を大まかに収集することができ、各住民の考えるニーズについても認識することができた。

各々のニーズは大まかながら把握できたが、これから全てのニーズに一度にアプローチすることはできない。また、FEST は各住民のニーズではなく、地域のニーズにアプローチすることを重要視している。

そこで、これから FEST とヴィラ住民で最初に行うプロジェクトについての住民の総意を得るために、FEST と住民による集会を行うこととした。

FEST

Student International Cooperation NGO FEST

QUESTIONNAIRE

Maayong hapon!
We are Japanese students' NGO FEST TOKYO.
We would like to do some projects with you to solve the problems in Villa and improve your lives.
Before starting the projects together, we would like to know what you need with this paper.

①Please write name of your family members in your house.

Name:	Age:	Relationship:

②What are the occupation of some of the members of the family?

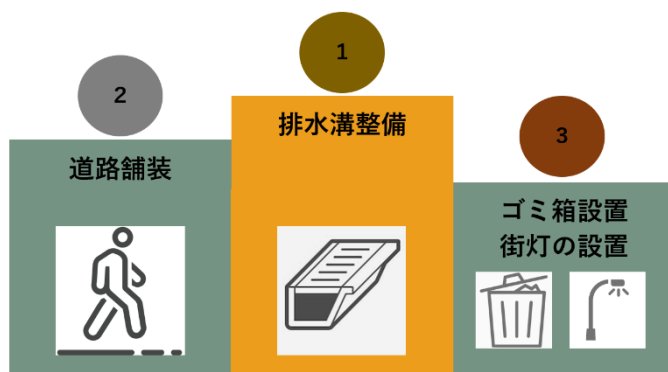
③Do you have any issues which you want to improve in Villa Saceda Compound?
If you have, please fill them out.

Thank you for your answer!



【第1回集会(3/17)】

トピック① アンケート集計結果の共有



アンケート結果を住民に共有しそれぞれの意志を確認したところ、満場一致で排水溝の整備とされたためこれに取り組むこととした。

トピック② ニーズの深掘り

現状の排水溝によりどのような悪影響が生じているか、その根本的原因は何かということを住民間で意見を出し合って深めてもらった。

ヴィラの排水溝の現状

地域内で整備状況に差があるものの、ほとんどの排水溝は蓋がついておらずむき出しになっている。そのため、子どもが足を踏みはずしてケガをすること、蚊の発生源となりデング熱を発症することなどの問題がある。また、地面を掘ったままの部分は浅く水の流れが悪いため、雨が降ると排水溝が機能せず、雨水と汚水が一緒にあふれ出し冠水する。

住民は地域の最重要課題だと認識しているが、資金不足により住民たちだけではアプローチできない状況にあると考えている。

また、ヴィラは私有地であるという理由で、バランガイは排水溝整備を実施する及び予算を当てられない(追加)ことができない旨をバランガイのキャプテンとの面会時に伝えられた

③ニーズ精査

プロジェクトで取り組むニーズは決定したものの、住民がどのような排水溝を望んでいるかを把握しないまま支援に踏み切るのは危険である。なぜならば、排水溝を工事するのはFESTではないが、FESTが資金を出す可能性があり排水溝の規模を知る必要がある。また、プロジェクト始動前に住民間の理想とする排水溝のレベルを統一させなければ、排水溝の設計段階や整備終了後に意見の相違からトラブルに発展しかねない。



日本に住む私たちがよく知る排水溝と、彼らがイメージする排水溝が一致するとは限らない。また日本のような排水溝を彼らもきっと望んでいるだろうという思い込みも FEST が目指す支援の形からは程遠いといえる。そこで、排水溝に対するより詳細な情報収集を行った。具体的には、住民の求める排水溝の整備度合いが不明確であったため、これを詳しく把握することを目的に、排水溝アンケートを実施した。

ヴィラの理想的な排水溝

住民が求めている排水溝の整備度合いは、以下の通りである。

- ・蓋が設置されている
- ・深さ・幅・長さが調整されている
- ・道の中央に設置されている

そして、春渡航撤退前に帰国後の FEST の動きを明確化し住民と共有しておく必要から、2 回目の集会を行った。

【第 2 回集会(3/24)】

トピック① ニーズの正式発表

「排水溝整備」が地域の最優先のニーズであり、FEST としても何かしらの整備改善を取り組めると判断し、「排水溝整備」をヴィラ地域のニーズとして正式に決定することを発表した。

トピック② 公式の連絡役の任命

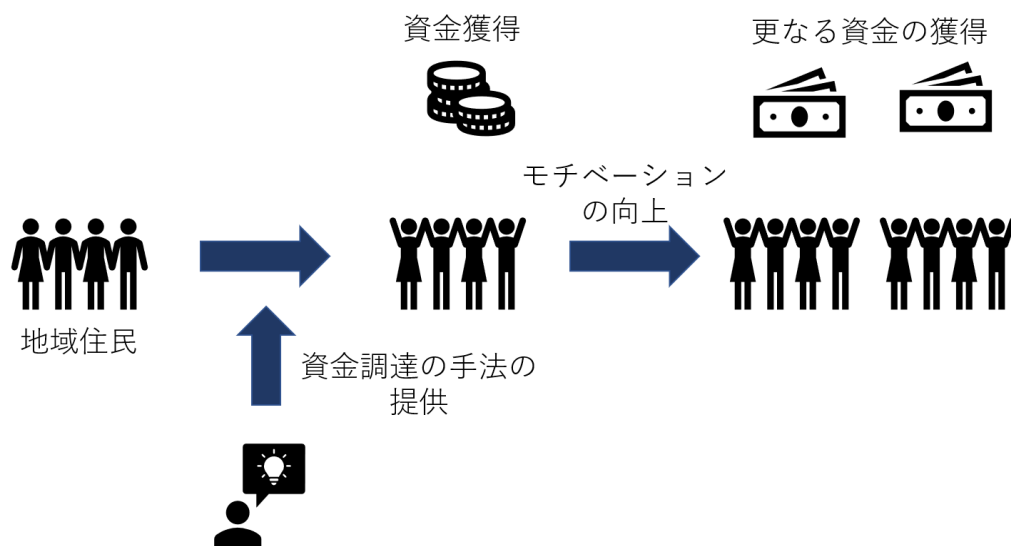
帰国後、日本から住民とのプロジェクトを進行していくにあたり、Auditor (監査) を FEST との連絡役に任命した。



✓ 春渡航での成果

- ・新たな支援地を正式に決定した
 - ・ヴィラ地域のニーズをヴィラにおける地域全体のニーズを「排水溝整備」と決定した
 - ・住民と良好な関係の基盤を構築した
 - ・ balanガイキャプテンとの面会を実現した
- (支援開始の許可を得られた。ヴィラ住民、FEST、balanガイの3者が揃う機会を設けられた。)

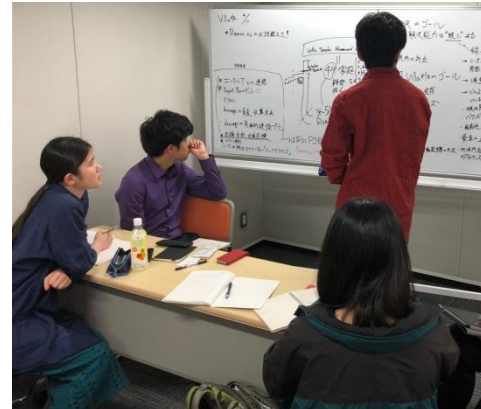
4. 夏渡航計画 (2019年4月～7月)



2019年春渡航終盤に、排水溝整備費用の見積もりをbalanガイから紹介された技術者に依頼した。帰国後に見積書が送られ、費用が35万ペソ(約70万円)と判明した。住民の収入状況から、この金額を払える可能性は低いと考えられた。さらに、ニーズ調査の結果から住民らが排水溝以外のインフラ整備も望んでいることがわかる。そのため排水溝プロジェクトの終了後も、新たな地域の問題解決のためにさらなる資金が必要になることが予想された。

こうして、支援の方向性を「住民が資金調達の手法を得られるプロジェクト」(上図)に決定した。

具体的には、住民の自立を目指すという団体方針の下、実際に費用を工面する主体を住民に設定した。その際、FEST からの提案だけではなく、住民からも工面方法を提案してもらい住民自身のアイデアを取り込める可能性にも重きを置いたので、住民との話し合いを行うこととした。これは FEST からの提案だけでは、FEST 主体の支援になるからである。



FEST 側としては、ヴィラでは、毎月の Urban Poor の支払いに関して、地域でまとめて支払うために地域組織が各家庭から集金を行うことで機能させている。そのため、住民内の話し合いの場でも住民が既存の枠組みの活用を考え「集金」を発案するだろうと推測した。しかし、少額の資金を時間をかけて集める地域内での集金だけでは将来的に必要な多額の費用を賄えない可能性が十分にあったので、FEST 側からの提案としてクラウドファンディングを考えた。他にも候補は挙がったが、下図のようなデメリットが目立ち、実現可能性と持続可能性に欠けていると判断し不採用とした。

〈考えられる方法と特徴〉

採用	不採用	
クラウドファンディング	住民の所得向上	FESTからの貸与
・パトロン獲得の広報が主な作業であり、比較的住民の負担が軽い。 ・FESTに金銭的に依存しない。	・共働きの家庭が多く、ビジネスを始める時間的余裕がないだろう。	・無利子であれ、高額な支払いをすることになり、資金援助に終わり得る。

5.2019年夏渡航

(2019年8月6日～28日実施)

<経緯>

① クラウドファンディングの提案

【第3回集会(8/11)】

トピック① 資金調達方法の話し合い

渡航前の計画をもとに、全住民を集めた集会でクラウドファンディングの紹介をしたところ、以下の反応が得られた。

▼住民の反応

- ・私たちにはできないと思うけど、FESTにならできるだろうからFESTだけでやってくれていい
- ・クラウドファンディングは火事や家庭内暴力など、もっと大きな問題に使うものだから、この地域の問題にはふさわしくない

▼考察

- ・多くの住民にとって初めて耳にする言葉・概念で理解が難しくて不安を感じたのではないか
- ・ある程度住民が知識を持っているというFEST側の見込みが甘く説明が丁寧でなかったのではないか
- ・言葉としては知っていてもその理解が誤っている住民に対しその誤解を払拭できなかったのではないか
- ・FEST側のビサヤ語・英語能力の不足で住民にとってわかりやすい説明ができなかったのではないか

以上のように全体的に反応が極めて芳しく、積極的な姿勢の兆しさえ見受けられなかった。このままではFESTが一方的に手法を押し付ける形になるという危惧を感じたため、クラウドファンディングの提案を取り下げた。

トピック② 新たな排水溝の見積もり

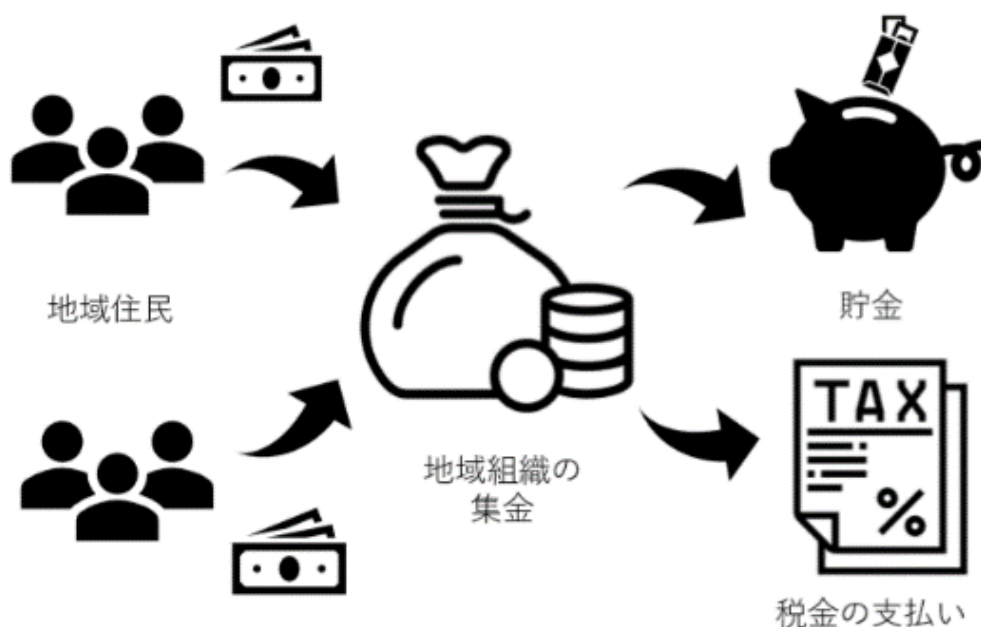
一方、従来の35万ペソ(約70万円)の見積もりが高額すぎるということで、土木の知識がある住民が自主的に独自の見積もりの作成をしていることが判明し、予算は6万ペソ(約12万円)に大幅に縮小された。この金額の差は、これまで前提視してきた「必要以上に高度な整備度合い」から「住民の求める度合い」まで整備度合いの程度を下げたことによると考えられる。



②Monthly Duesへの着眼

【概要】

Monthly Duesとは現地の地域組織が3年前から地域内の全家庭を対象に集めている町内会費、管理組合費のようなもので、地域全体に関わる税金の支払いなどに充てている。



現在、各家庭から月々50ペソ(約100円)を集めている。収入から支出を差し引いた年間積立金額は最大で1万ペソ(約2万円)であり、順調にいても排水溝の見積もり費用の6万ペソの調達には6年かかることになる。しかし、実際の納入率はとても低い。

なお、一般住民の反発から、来月(2019年9月)より月々20ペソ(約40円)への減額を予定している。

Monthly Duesに関しては、地域組織のオフィサー側と一般住民側とで認識に差が生じている。

<地域組織のオフィサー>

一般住民はMonthly Duesの用途について関心がなく、不明なことについても質問しに来ないで文句を言っている。集会で説明をしようにも、出席してくれない住民がいる。

<一般住民>

地域組織はMonthly Duesの使途の明細を十分に示してくれないのに毎月集金している。また、地域組織は自分の役割責任を果たしておらず、集金を私益のために悪用しているのではないかと疑われている。



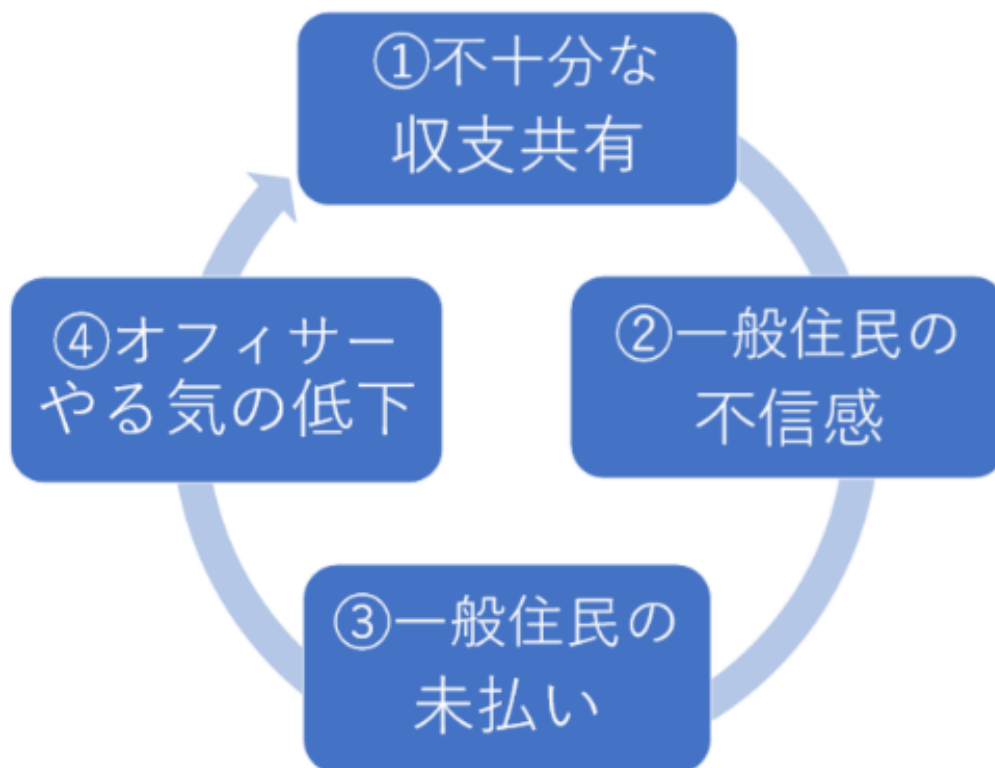
FESTによる考察

▼現在の地域状況＝地域組織のシステムの欠陥

- ・地域組織のオフィサーのうち、Treasurer(記録・集金)およびAuditor(監査)はノウハウを持たない一般の主婦である
- ・平日は働いている大人が多いため、比較的時間の余裕があるという理由でオフィサーに選出された
- ・オフィサーの仕事には給料が発生せずモチベーションが低い
- ・この状況が次の選挙時に変化するとは考えにくく、再選が有力視されている

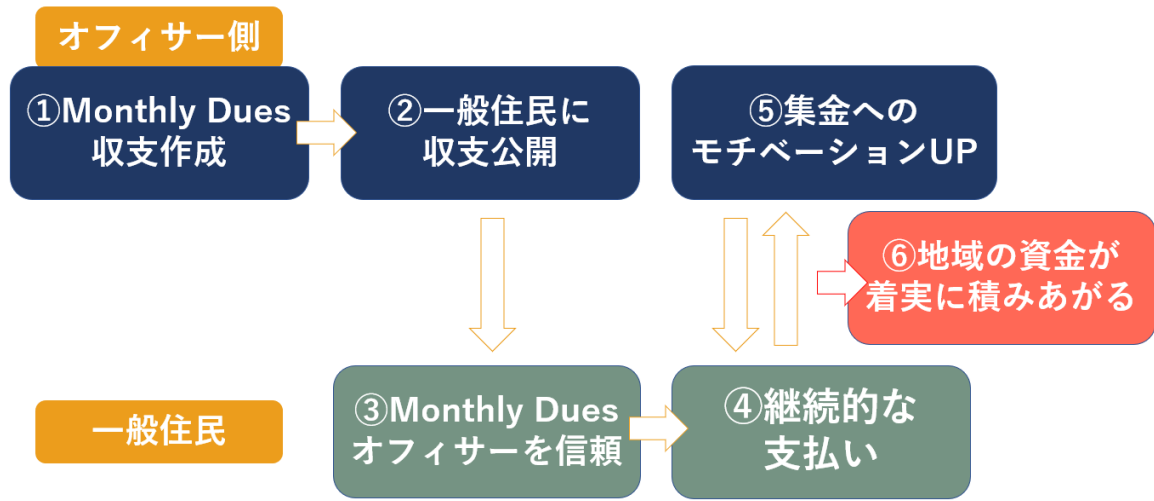
そのため、以下の悪循環が起きている

- ①Monthly Duesの収支の明細などが住民に十分に共有されない
- ②一般住民はMonthly Duesについて不信感をもつ
- ③一般住民がMonthly Duesの支払いを拒否する
- ④オフィサーの集金に対するモチベーションがさらに低下する



▼今後の改善計画

- ①オフィサーがFESTのサポートの下、Monthly Duesの監査を行う
- ②オフィサーが一般住民にMonthly Duesの収支を公開する
- ③一般住民がMonthly Duesや地域組織を信頼するようになる
- ④一般住民がMonthly Duesを継続的に支払うようになる
- ⑤オフィサーのMonthly Duesの集金へのモチベーションが高まる
- ⑥Monthly Duesにより地域の資金が着実に積みあがる



✓夏渡航での成果

- ・実現可能性のある排水溝のプランを入手した
- ・実現可能性のある資金調達方法の目途を立てた
- ・FESTの支援における長期的スパンの見通しを持った

6. 2019夏渡航後(2019年9月以降)

① 支援地仮説の設定

FESTの社会貢献モデルにならない、ヴィラにおける仮説を設定した。

支援地仮説

「ヴィラ住民が自分たちで地域の問題を解決出来ていないのは、
地域組織のシステムの欠陥に起因している。」

< 仮説設定までの経緯(詳しくは各項目参照) >

1.2019年春渡航・夏渡航計画段階

春渡航における地域での住民への聞き込みの状況から、住民たちの所得の少なさによる「資金不足」を地域問題の解決における阻害要因と推定し、夏渡航にはFESTからの提案としてクラウドファンディングを持ち込んだ。

2.2019年夏渡航段階

夏渡航で得た情報をもとに、「資金不足」よりもむしろ根本的な原因は「地域組織のシステムの欠陥」にあると判断し、これを阻害要因とした。



② 現地との連絡体制

夏渡航終盤に引き続き、地域組織のオフィサーからMonthly Duesの監査の進捗状況を得ている段階にある。しかし、SNSのチャット機能を通じた彼らからの連絡は途絶えがちになっている。その一因として、FESTとしては、現在フィリピン内に専属の協力者を持っていないということが挙げられる。そこで解決策として「現地にコーディネーターを設置し、現地と日本国内で連絡・連携を密に取りながら、動いていく」という方法が一つの選択肢として考え得る。

7. 長期的支援計画

夏渡航での聞き込みにより、「住民が排水溝整備の完成まで長期間かかる場合でも待つという姿勢を示していること」及び「住民のMonthly Duesへの支払いが滞りがちなのは金額の大小ではなく運用への不信感があること」の2点が判明した。

そこで、現在FESTとしては、Monthly Duesの仕組みを整えて一般住民の信頼を回復し、納入率を改善することで排水溝整備の資金を調達する計画を立てている。

幸いにも、地域組織のVice President(副代表)が収支の透明化の必要性をよく理解しているため、日本から連絡を取りながら少しずつ進めていく計画である。

<Monthly Duesの理想状態>

▼集める側(地域組織のオフィサー)

- ・全ての収支の資料/領収書/記録を整理して明示する
- ・ノートに全てをまとめる
- ・住民向けの正式な書類を作成する
- ・それを地域組織の集会の場で発表したうえで、集会に参加できなかった住民に向けては書類の配布により情報を共有する

▼集められる側(地域の一般住民)

- ・地域組織が一般住民に向けて共有した収支情報を得る
- ・それを信用し、地域組織を完全に信用するようになる
- ・全家庭が月50ペソ(約100円)(以上)の支払いを継続するようになる

最終的には、Monthly Duesの積立ができるようになり、排水溝や道路補修の工費の調達ができるようになることを目指す。



国内フotワーク

事業部

目次

- 0. はじめに
- 1. 役割
- 2. 9 期概要
- 3. 出張授業
- 4. 春渡航報告
- 5. 夏渡航報告
- 6. 来期展望

0. はじめに

国内フォトワーク事業部の啓発は最終的に対象者に「国際協力をしてもらうこと」や「社会問題解決」のために「行動」してもらうことを目指している。9期国内フォトワーク事業部ではそういった「行動」の前の「考え方を変えること」や行動に移すための「きっかけ」作りをすることを目指してきた。そのための1年間を見ていただきたい。

1. 役割

国内フォトワーク事業部はFESTにおいて「啓発」を担っている事業部である。FESTでは「啓発」を「新しい知識を得てもらうだけでなく、より高く深い認識や理解に導くこと」と定義しており、9期以前の国内フォトワーク事業部では対象者がさらに「行動」に移させることを目的としている。これまで首都圏を中心に出張授業やワークショップ、写真展などの活動を行ってきた。

9期では対象者に行動してもらうためには、考え方や知識を変えることも役割の1つであると考えている。

2. 9期概要

国内フォトワーク事業部が行ってきた、国際協力の分野で行動を起こす人を増やすプロジェクトは、国際協力の幅を増やし質を高めるという意味でFESTの役割の1つであると考えている。9期以前の国内フォトワーク事業部では「国際協力をする人を増やすこと」や「社会問題解決のために行動する人を増やすこと」を目的としてきた。そのため、社会課題解決への行動を起こしやすい人を「国際協力分野に興味がある人」や「社会問題に興味がある人」と捉え、そのような人々を対象者としてきた。

しかし、9期では行動を起こす人数をより増やすため、そのような対象者以外の、行動を起こしにくい人に焦点を当てる。つまり社会問題や国際協力に興味がない人、及び社会問題に対する少ない情報をもとに、正しくない固定観念を持っている人を対象にしたいと考えた。

(1)目的・目標・対象者

目的 :【社会問題を多角的な視点で捉えてもらう】

目標 :【物事を判断するための多角的な情報を与える】

対象者 :【社会問題に固定観念、そもそも問題意識を持っていない人】

これらの対象者は「少ない情報量や偏った情報」または「その人が持つ元々の価値観」によって、「固定観念をもつ、または問題意識を持たない」と考えられる。私たち FEST は、質や量を担保した情報を対象者に提供することによって、対象者の持つ固定観念の根拠の変化、そして問題意識を持ってもらうきっかけを作りたいと考えている。

しかし対象者のもつ元々の価値観により、社会問題への主観的な意見が変わらないことは十分に考えられる。そのため、最終的な目的を、これらの対象者が「社会問題を多角的な視点から判断すること、つまり「対象者の主観的な意見が多く の情報を基に考えられた意見になること」とする。

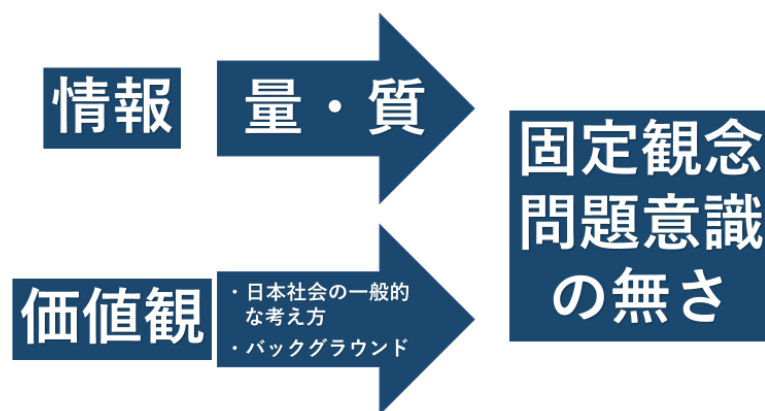
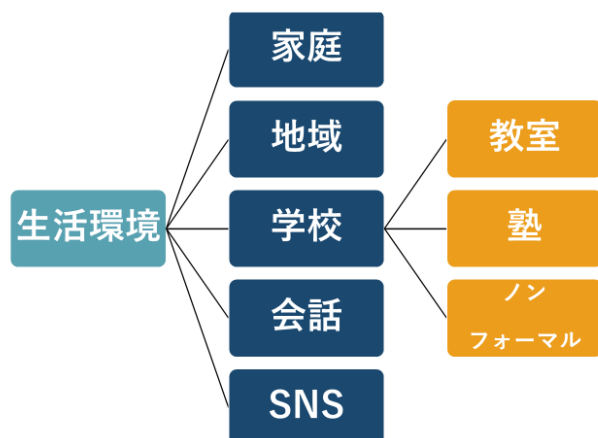


図1

(2)方針

【日本の生活環境へのアプローチ】

私たちは普段の学校での授業や友達や先生との会話、SNS などを通して情報を得て、社会問題に対する考え方を身に付けている。この学校や友達、SNS は「生活環境」という言葉にまとめられると考えた。そこで 9 期としてこの「生活環境」へアプローチしていくこととした。



「生活環境」を図 2 のように細分化した。この中で「家庭」や「会話」というものにアプローチしていくことは難しいが、SNS・学校、さらに学校を細分化した中の教室とワークショップなどのノンフォーマル¹へのアプローチは可能であると考えた。

図2

3. 出張授業

(1)概要

2018 年 11 月に聖学院中学校の 1 年生を対象に出張授業を実施した。対象者が中学生であったため、扱う内容を社会問題の中でも「教育問題」という身近に感じられるテーマにした。目標を「国際問題に目を向けてもらい、国際協力をもっと身近に感じてもらう」として 2 クラス、計 56 名の生徒に対して実施した。

¹ ノンフォーマル教育 …フォーマル教育と呼ばれる固定されたカリキュラムなどが存在しない様々な学習状況についての緩い定義である。例として教育委員会の主催する学習教室やスイミングスクール、ボーイスカウト、ガールスカウト運動などがある。

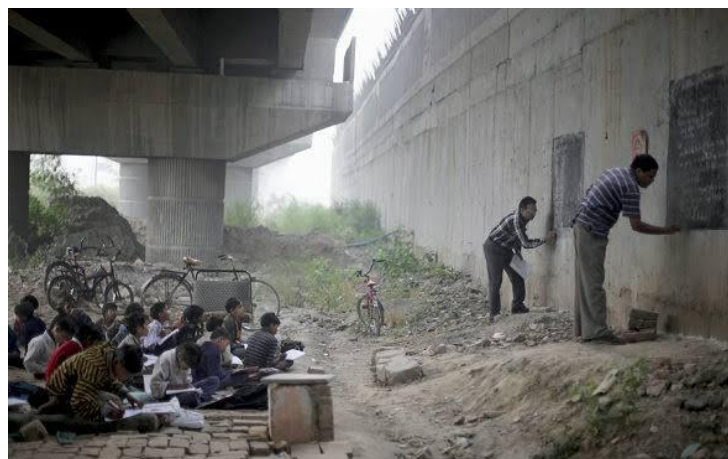
(2)内容

国際協力は言葉だけを聞くと敷居が高く、とても難しいものを感じる。しかし「中学生でも小さいところから始められる」ということを伝えることにした。そのために「国際問題に目を向けて、国際協力をもっと身近に感じよう！」というテーマのもと、教育問題の実例の提示を行うとともに解決策を考えてもらった。また国際協力と日本でも行えるボランティアを繋げることで、国際協力や国際問題を身近に考えてもらい、ボランティアの意義について伝えた。

①授業の流れ

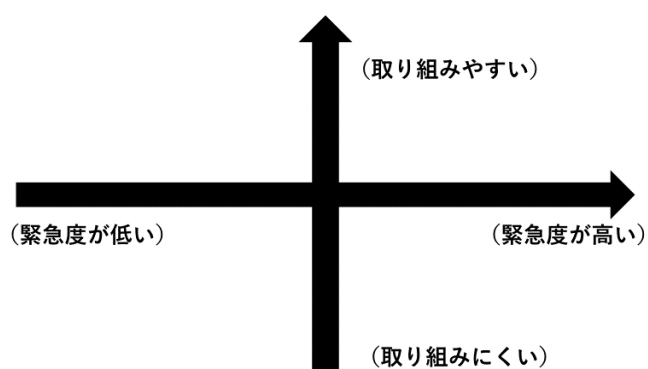
i. 教育問題の写真を提示して「どんな問題が隠れているのか」考えてもらう

国際問題や国際協力への新たなイメージをしやすいとする。また、どんな問題が隠れているのかを考えてもらい、興味関心を持つことで生徒の意見を出しやすくするため。授業ではインドの「橋の下の学校」の写真を取り上げた。



「橋の下の学校」

ii. 問題の優先順位をつける



マトリックス²を使用して緊急性が高いものと低いもの、取り組みやすいものと取り組みにくいもの、の順に問題を配置してもらった。

* 授業で使用したマトリックス

² マトリックス…縦軸と横軸を使い、縦横の項目を配置し、重なったところに結果などを書く図のこと。全体の中のどのあたりに位置するのかをわかりやすく示すことができる。

iii. 最も解決しなければならない問題の解決策を考えてもらう

「問題を明確にすること」「解決後の理想的な目標」「解決方法を‘どうやって？’を繰り返して明確にする」という3つのステップを使って考えてもらった。

【例:先生が少ないという問題】



* 高校生が考えたもの

iv. FEST から解決策の提示をする

FEST の支援の特徴である「住民の意見に沿った支援」「住民主体での問題解決」を説明した。その中で「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えよ」という言葉を紹介し、支援においてお金をただ単にあげることよりも、どうやってお金を集めるかを教えてあげたほうが、将来的にも自分たちでお金を集めることができるため、方法を教えることは大切ということを伝えた。

vi. ボランティアと今できることの提示をする

国際協力とボランティアを繋げることで、国際協力や国際問題を身近に感じてもらうとともに、ボランティアを行う意義を伝えた。例えば日本で災害があったときにボランティアに行くことや道端のゴミを拾うことは、気持ちの面で国際協力と繋がっているということである。

また日常でできることとして、新聞を読むこと、インターネットや本で情報を集めることや募金やリサイクル、そして応用編としてボランティア活動への参加や論文やエッセイを書くこと(JICA の中学生エッセイコンテスト)の紹介をした。



授業の様子

(3)実施後

授業を行った2クラス(計56人)にてアンケートを実施した。「自分たちのボランティアが国際協力と繋がっていると知れてよかった」や「国際協力を身近に感じた」という感想が多くみられた。また、授業後に「JICAのエッセイコンテストにどうすれば申し込めるのか」と直接質問に来てくれる生徒もいた。しかしこういった感想は少数であり「国際協力を身近に感じてもらう」という目標は達成できていないと考えた。しかし「国際問題に目を向ける」という目標は「教育問題が深刻であることがわかった」や「自分が恵まれていることがわかった」という国際問題に関する感想が多かったことから達成できたと考える。

4. 春渡航報告

聖学院中学校で行った授業から、今後出張授業を行うに当たって自分たち自身がフィリピンの教育問題の現状を知る必要がある。そのためのリソース回収を行うためにフィリピンの教育問題について深い調査をしたいと考えた。また下記のアンケート結果から日本の若者への啓発をするためにSNS発信用の情報収集を行うこととした。プロジェクト内容としては、①SNS プロジェクト ②教育問題プロジェクト の2つである。

(1)PJ 内容

①SNS プロジェクト(以下PJ)

アンケート調査

一般的な日本人はセブ島とフィリピンに対してそれぞれ違うイメージを持っているのではないかと考えた。そこで昨年の12月にSNSを利用してセブとフィリピンに対してのイメージ調査をするためにアンケートを行った。結果として学生を中心に約120名から回答を得ることができた。質問の内容は以下の2つである。

1. あなたはセブ島に対してどのようなイメージを持っていますか？

2. あなたはフィリピンに対してどのようなイメージを持っていますか？

それぞれ記述式で回答してもらい私たちが「陰のイメージ」と「陽のイメージ」というふうに分類分けを行った。図 3 はその割合である。

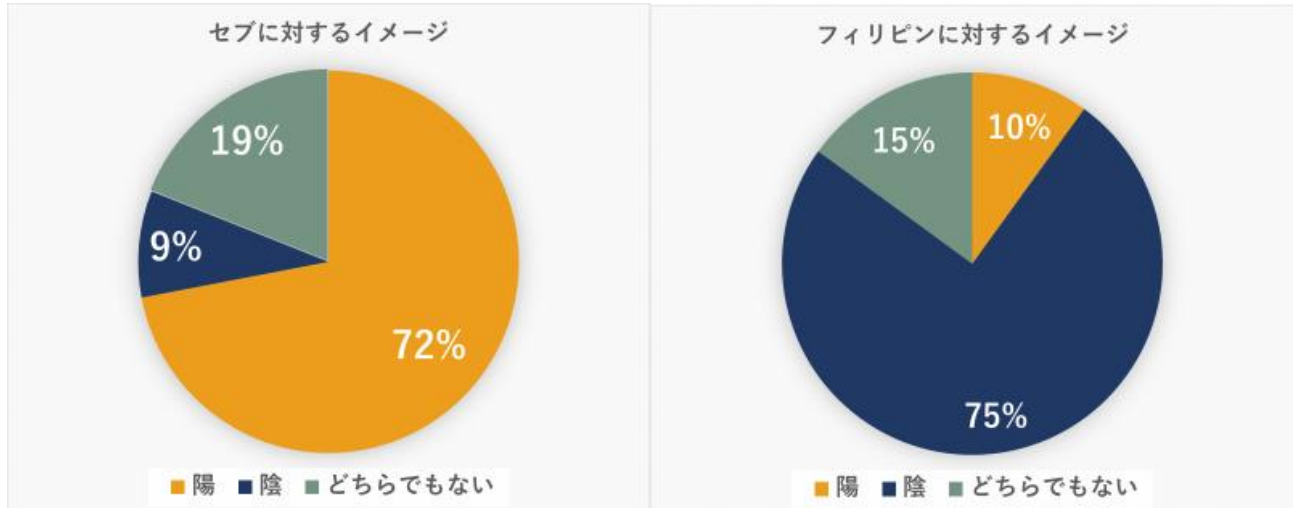


図 3

〈分類の例〉

陽のイメージ …リゾート、綺麗、おしゃれ、観光地など

陰のイメージ …貧困、スラム、治安が悪い、汚いなど

どちらでもない …聞いたことはある、英語など

このようにフィリピンに対しては陰のイメージが多かったが、セブ島に対しては陽のイメージという回答が多かった。

対象者

アンケートの結果、回答者の 90%以上が高校生・大学生であった。この層は SNS の使用率が特に高いと思われるため、PJ の対象者を 10～20 代の男女とした。また、セブ島が観光地であることから、海外好きや、写真が好きな人を対象者とした。

SNS の投稿内容

アンケート結果からセブに対してのイメージは「リゾート」「観光地」というものが多かった。対象者に対して届けたい内容は「陽」の中にある「陰」の内容であるが、それだけでは対象者に見てもらうことはできない。またどちらかの内容に偏ってしまうのは新しい偏見を生む原因になってしまうと考えた。「陰」と「陽」の内容だけでなく、セブの基本的な知識を身に付けてもらうため、セブをイメージしやす

くし対象者の興味を引くために「文化」の内容を入れることにした。また同じ日本の中にセブ＝リゾート・語学留学というイメージがあると感じ、長くセブに住んでいる日本人の方にインタビューをし、セブにきた理由や来た後での印象の変化、セブで体験した出来事などについてお話を伺った。

i. 陰と陽

対象者の目を引くと予想されるセブのリゾートなどの写真と、そこで働く貧しい人々の写真を撮影し、陰と陽の対比として投稿する。

ii. 文化

社会問題を捉える前にその国について知ってもらう。フィリピンの伝統文化やリゾート以外の観光地の写真を投稿する。

iii. 日本人の視点

セブに長く住んでいる人に話を聞いて、そこでの印象や日本に居た頃との印象の変化などについても聞く。

達成目標

媒体	フォロワー数
Twitter	8,000
Facebook	2,500
Instagram	1,000

対象者にセブに対して新しいイメージを持ってもらうために多くの情報を提供する必要がある。多くの情報を得てもらうためには継続して投稿を見てもらうこと、つまりアカウントのフォローをしてもらう必要があると考えた。そのために上記のような目標を設定した。

春渡航の内容

i. 陰と陽

関連する写真は全く撮れなかった。前回渡航よりもストリートチルドレン³がいそうな場所や撮影が出来そうな場所を訪問したものの、撮影できなかったことを受け、原因を考察した。

・フィリピンのストリートチルドレンに関する知識が足りなかった。物を路上で販売している子どもはいたが、ストリートチルドレンの定義が曖昧であり、一目見ただけでストリートチルドレンなのか判断することができなかった。

・主に平日の午後(13時から15時)に撮影を行っていたため、それ以外の時間帯または週末に撮影ができた可能性がある。日曜日は礼拝があるため現地の人だけでなく観光客も多いため、路上や道端でモノを売る人が平日よりもかなり多くなる。

ii. 文化

観光地

・テンプルオブリア	セブの大富豪が亡き妻の為に建設している建物。セブの街が Tops 同様一望できる。
・モール	アヤラや SM などセブの巨大なショッピングモール。
・サントニーニョ教会 (内・外・周辺屋台)	セブ最古のカトリック教会。日曜日は多くの人でにぎわう。
・マゼランクロス	サントニーニョ教会の隣にある十字架。マゼランが 1521 年に持ち込んだ。
・サンペドロ要塞	500 年近く前にスペインによって作られた要塞。
・Tops	セブの市街地を一望できる高台。
・シラオフラワーガーデン	セブの山間部にあるフラワーガーデン。日本人にはあまり知られていない。
・Heritage of Cebu	セブの記念碑。セブの英雄ラプラプがマゼラン軍と戦っている様子が彫られている。

³ ストリートチルドレン…親や家を持たず路上で生活をする者。EMS 代表の池頭さんによれば家や親がいる者もあり、金銭を得るために路上で物乞いやモノを売っている子供も含まれるという。

・タオイストンプル	セブに住む中国人コミュニティによって作られた道教寺院。
-----------	-----------------------------

美術館

・ヤップサンディエゴ	スペイン植民地時代に移り住んできた中国人によって建てられた。現在は美術館になっている。
・ガサゴルド美術館	スペイン人の商人が住んでいた建物。アンティークなどの小物の展示が多い。
・ムセオサグボ美術館	かつては刑務所だったが現在は博物館になっている。スペイン統治時代の歴史が学べる。

交通手段

・ジプニー	バスのような交通機関。好きなタイミングで乗り降りできて安い。
・トライシクル	自転車の横に椅子がついている。ジプニーが入れない小道などを移動できる。
・タクシー	初乗りは 40 ペソ(約 80 円) メーターが速く上がるタクシーもあるので注意が必要。

衣食

・ポロシャツ	フィリピンのフォーマルな恰好である。FEST もバランガイ訪問時に必ず着用している。
・制服	大学にも制服がある。
・伝統衣装	「バロン」といって、現在では基本的にパーティーなどの正装として着られている。
・バナナキュー	バナナに砂糖をまぶして揚げたお菓子。サツマイモのカモテキューなどもある。
・ジョリビー	国民的ファストフード店。ハンバーガーやスパゲッティ、チキンが食べられる。
・伝統料理	セブの伝統料理。豚の丸焼きのシングや酸っぱいスープのシニガンなどがある。

施設など

・バランガイ	フィリピンの地区の最小単位。FEST がよくお世話になっている。
・チャペル	各シティオにあるカトリックの小さな教会。FEST の住民集会はここでよく行ってきた。
・サリサリ	駄菓子屋のようなお店。支援地にもあり、FEST メンバーもよくジュースなどを購入している。
・公共機関	セブの消防署や警察署の紹介。
・行政機関	セブにはセブ州の州庁舎である「Capitol(キャピトル)」がある。

その他

・ロドリゲスストリート	セブの商店街。露店のようなお店が多く並んでいる。
・コロンストリート	ロドリゲスストリートよりも巨大な商店街。サントニーニョ教会が近い。
・硬貨、紙幣	セブのお金。全部で 15 種類もある。
・道路で水を売る人	道路の真ん中で水を売っている人がいる。
・会話(あいさつ)	セブはタガログ語である。「おはよう」は「Maayong buntag(マアヨン ブンタグ)」
・1ペソ水	1 ペソ(約 2 円)で冷たい水が飲める機械。
・York café	IT パーク内にあるカフェ。セブの喧騒を離れて落ち着くことができる。
・映えスポット	モールなどにあるオシャレなカフェの紹介。
・海	セブのきれいな海の紹介。

以上の施設やモノの撮影を行った。(計 37 個)



実際に投稿した写真(タイオストテンプル:左、フィリピンの制服:右)

iii. 日本人の視点

セブで生活している日本人、日本語学校の経営者の方や大学生を対象にセブの秘境ツアーをやっている方々など、合計で4人の方にインタビューすることができた。また日本でもセブに長く住んでいた方1人に話を聞くことができた。ここではセブに来る前と来た後でのセブに対してのイメージの変化や、セブで体験した印象的な出来事などを聞くことができた。

日本での活動

『セブに恋して』と題して4月下旬から7月にかけてSNSの3つの媒体を使用して上記の中でも「文化」についての情報発信を行った
〈フォロワー数の変動〉

SNS 媒体	開始前(2019/4)	増加数(2019/7)
Twitter	4,680	60 人程度
Instagram	110	70 人程度
Facebook	1,200	50 人程度

フォロワー数の伸びはInstagramが最も大きかった。このことから写真の投稿に関してはInstagramが最も適した媒体であることがわかった。しかし効果測定を実施しなかったため対象者がセブの「陰」の部分を知れたのか、投稿を見てセブにどのようなイメージを持ったのか、投稿による効果を知ることができなかった。

②教育問題 PJ

生活環境の中でも学校教育へのアプローチ方法として学校への出張授業を考えた。

内容

聖学院中学校では1年生に対して授業を行った。この授業ではグループワークで生徒たちに教育問題について考えてもらい、ただ話を聞くだけの授業にならないように工夫をしたが生徒たちの興味や関心を引くことは難しかった。また生徒のアンケートの中に「難しかった」という感想があり、中学3年生から高校生を対象とすることにした。また、聖学院中学校ではSDGs⁴の教育を行っており生徒の国際問題への関心や理解力が高かったため、9期国内フォトワーク事業部で設定した対象者には合わないと考えた。そのため国際色が薄いと考えられる公立校を対象とすることにした。

また授業内容として対象者が学生であるという点から、彼ら彼女らが身近に感じることができるテーマであると考え「教育問題」に絞ることにした。もう一つの理由として実際に取材を行うにあたってセブで教育問題にアプローチしているNGOなどの団体が多かったためである。

春渡航の内容

授業におけるリソース回収のためにセブで教育支援をメインに行っている4つの現地機関へ取材を行った。

機関	支援内容
セブンスピリット	音楽やスポーツによる教育支援
SLPC	ストリートチルドレン支援
EMS	子どもの交流、給食支援
名前非公開	教育支援

この20年でセブやフィリピンは大きく経済発展を遂げたが、その裏で物価の上昇(20年で2倍になった)などの影響もあり、取り残された人々が多くいるという。取材の結果、以下の問題がセブの教育問題としてあげられた。

⁴ 持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals)・・・国民の未来を守り、将来的にも豊かな暮らしができるように2016年から2030年の15年間で世界が達成すべき目標のこと。

a. 植民地時代の影響

かつてフィリピンはスペインとアメリカの植民地であり、当時は現地住民の反乱を防ぐために宗主国は十分な教育政策を行わなかった。一方でアメリカは植民地支配を容易に行うために英語教育に力を注いでいた。その影響もあり今でも英語を話せる国民が多い。

b. 宗教

カトリックの影響が大きい。生活で起こる物事を「神」に結びつける傾向がある。例えば、物が落下するのは重力が働くからという答えに至る。しかし、フィリピンでは「神」が関係していると考えている。幼少期からそのような考え方に触れているため、初等教育で学ぶ学問的な考え方が身につくづらい。フィリピン全体で理数系が弱いのはこの影響が大きいという。この「神」に結びつける考え方はフィリピンの中で「慣習」として染み込んでしまっているという。

c. 教師の質

教員の質が悪い原因として、給与が低いこと(給与がコマ単位で決まる)があげられる。また若く能力がある人材は過剰労働を強いられることや賄賂の横行などの原因が挙げられる。近年はドゥテルテ大統領の改革によって給与の上昇など改善が見られるという。

d. 子どもへの対応

日本では、学校に来ない子どもたちに対して教員が自宅に訪れたり、NPO 団体がボランティアで住民と協力したりして救済措置を取り、子どもたちの教育の機会を保障する。しかし、フィリピンではそういった対応が皆無であり、ドロップアウトの原因の一つとなっている。



EMS の支援地訪問では「墓地スラム」を訪れた。墓地スラムはかつて中華系の富豪が管理していた墓地であり、管理がされなくなった後に貧しい住民が住み着いたことでスラム化した。富豪の墓地は屋根や壁があるため雨や風を防ぐことができる。多くの住民が墓地の中に住み遺体を入れる石棺をテーブルやベッドとして使用している。訪問時にこの地域の住

民にインタビューをすることができた。

e. 親のドラッグなどの犯罪により教育を受けることができない

親が働けなくなり、文房具などの必需品を買うことができない。フィリピンの小学校では授業料などは無料であるが通うための通学費や文房具等は日本と同じく自費である。そのため継続的に学校へ通うことが難しい。

g. 若くして妊娠することでドロップアウトしてしまう



性教育が行き届いておらず若くして妊娠してしまうケースがある。地域内では14～16歳で妊娠する女性がいるという。私たちがインタビューに応じてくれた女性も20歳で妊娠・出産しており大学を休学していた。インタビュー中も子どもの面倒を見ていた。

h. 洪水によって学校に行けなくなる



大人の腰の高さまで水かさが増すために学校に行くことができなくなる。

5,000人ほどの人が暮らしている墓地スラム

日本での活動

4期では「地域教育推進ネットワーク東京都協議会」に入会しており、都立高校への出張授業を実施していた。公立高校では授業のカリキュラムがある程度決まっている場合が多く、地域教育推進ネットワーク協議会のような組織で繋がりを作らなければ出張授業を実施することは難しい。しかし団体内でこの組織へ入会しているということが引き継がれていなかった。そのためこの入会の事実を確認することに時間がかかってしまった。

またメンバーの出身校などにアプローチすることを考えたが私立高校出身のメンバーが多く、公立高校出身でも地方出身のメンバーだったため難しいと考えた。

今後、渡航で得た情報と地域教育推進ネットワーク東京都協議会の情報を 10 期メンバーに共有し、出張授業を行える体制を整えていく。

5. 夏渡航報告

(1)T シャツ展 PJ

①概要

2019 年春渡航にて多くの写真を撮影し、それらが FEST に見学に来る方々に好評であった。しかし、外部に発信できる機会が 4 月時点で SNS しかなかったため、FEST が啓発できる場を増やし、対象者に多角的な情報を与えるためにオフラインでの企画をすることとした。また国内フォトワーク事業部の「多角的視点を与える」という活動目的に沿って様々な国の写真を集めるため他団体との合同企画で行うこととした。

写真のテーマは、初めてセブに行ったメンバーの印象がとても大きかった「ゴミ」を扱うこととした。昨年 12 月で行ったアンケートの内容で、セブでは「リゾート」や「観光地」という陽のイメージが多かった。そのため陰のイメージが強い環境問題の情報発信を行うことにした。

しかし単に「ゴミ」の情報を発信しても対象者には届かない。対象者に届けるために、若者に人気があり、日常的に使う頻度の多い T シャツを使用したイベントの開催(以下 T シャツ展 PJ)を考えた。プロジェクトを通して対象者が環境問題に触れられる機会を作り、なおかつ「行動」(自分から社会問題について調べることに移してもらえるようにしたいと考えた。そのためにアップリフトモデルを作成し、対象者が段階を踏んでいけるようにした。

アップリフトモデル

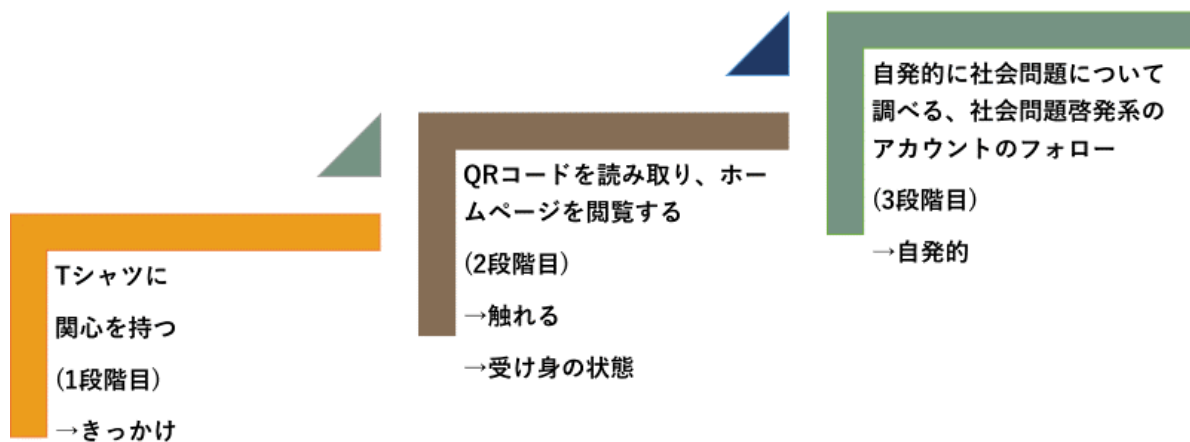


図4

1 段階目 (きっかけ)…T シャツに興味を持った参加者が T シャツ展に来場し、T シャツにプリントされている写真を見る、または T シャツを購入する。購入したか否かに関わらず、QR コードを読みとれるようにし、T シャツに QR コードを貼るという目新しさに興味を持ってもらう、または QR コードを読みとってもらうために T シャツの作られた背景が書いてあるという宣伝をして、来場者が QR コードを必ず読み取ってもらう仕組みを作る。

2 段階目 (触れる)…QR コードを読み取ってもらった後に、国内フォトワーク事業部が作成したセブのゴミ問題を扱ったサイトに飛び、それを読むことでゴミ問題に対しての情報を与え、さらに社会問題などに興味をもつように誘導をする。

3 段階目 (行動)*¹…徐々に社会問題に興味を持って自発的に検索ワードに打ち込みをうつことから始まり、社会問題啓発系の SNS アカウントのフォローをする、またイベントへ参加する。

T シャツ展はあくまでも、2 段階目までの関心作り、つまりゴミ問題に関心を持ってもらうためのきっかけづくりとした。

*¹なお、行動に移しているか移していないのかの定義は、

「自発的に検索に国際協力や社会課題などのワードを打ち込む」とする。

②目的・目標

目的:【環境問題を多くの情報を通して知り感じてもらう】

目標:【歪曲の無い写真や文章を用いて情報に触れられるようにし、
また印象に残るようにする】※印象に残すこと＝記憶に残すこと

アップリフトモデルを通じて、対象者が環境問題(ゴミ問題)に関心を持ってもらうために、写真や文章を通して知ってもらうことを目的とする。そのためには得た情報を家に持ち帰りいつでも触れられる機会を作ることが必要であると考え、対象者の「記憶・印象」に残るようにすることを目標とした。

③企画内容

【デザイン】

- ・インタビューを受けてくれた方の名前
- ・写真(夏渡航で撮影した、ゴミと人の写った写真)
- ・QR コードをプリント(ゴミ問題を啓発する為の HP に繋がるもの)

これらの内容を T シャツに入れることにした。HP には T シャツに使用した写真の詳細な説明やインタビューの内容、またその HP に繋がるように QR コードのプリントを入れることにした。



図 5:T シャツのイメージと HP へ繋がる QR コード

(2)夏渡航内容

概要

アップリフトモデルの2段階目では対象者にセブのゴミ問題について扱ったホームページ読んでもらうことを目標としている。このホームページを読んでもらうためにTシャツ展において、TシャツにプリントしてあるQRコードの読み取りを来場者に促すことにした。

このホームページの記事内容を取材すること、Tシャツにプリントする写真を撮影することも必要であるため現地でゴミ問題について取材することにした。

夏渡航取材地

①Inayawan(イナヤワン)

i. 地域概要

セブ市の中心部から10キロ程の場所にあるInayawan landfill(埋立地)は1988年からゴミが集められていた。その後2015年に完全に閉鎖された。埋立地自体は閉鎖されているが、その近くの民間ゴミ処理会社の運営するdumpsite(ゴミ捨て場)にはいまだに約80台以上のトラックによりゴミが運び込まれている。イナヤワンのバランガイスタッフに同行してもらい住民にインタビューを実施した。

ii. インタビュー内容

ゴミ捨て場付近にはプラスチックなどのゴミを売ること生活する人(スカベンチャー)が多く住んでいる。私たちが取材した地域では2019年2月17日に電線によって火事が発生した。何件かの家では豚を育てて売ること生計の一部を立てていたが、この火事によって多くの豚が死んでしまった。しかし日本の支援団体によって豚を再び手に入れることができたという。

この地域ではいまだにゴミが運ばれてきており、ウェストピッカーと呼ばれる産業廃棄物などの処理



施設で有価物を収集して生計を立てる人がある。ある女性はプラスチックを拾い生活しており1日の収入が150ペソ(約300円)程度であると話してくれた。プラスチックを拾うだけでなくバッグや靴を拾っている住民にも話を聞くことができた。インタビューした親子はゴミの中から靴や靴を拾い洗い修理をした後にマーケットで販売している。

積み上げられたバッグ



全ての住民に共通していることはイナヤワンのゴミ捨て場に関してネガティブな感情を持っていないということだった。健康被害を懸念している声はあったが、生活のために無くなっては困るというのが現実である。また多くの住民がゴミの集積が始まった30年ほど前にイナヤワンへ仕事を求めて移住してきていた。

イナヤワンのゴミ捨て場にゴミを運ぶ balan gay のトラック

iii. イナヤワンにおける JICA の取り組み

2014年頃からJICAによってイナヤワンに中間処理施設を建設し、廃プラスチックの燃料化のためのリサイクル処理、埋立地の縮小化を目指す事業が展開されていた。⁵この事業の目的としては、既存のリサイクル業者、balan gayと連携してリサイクルの仕組み整理やウェストピッカーや作業員の雇用創出や労働・安全・環境改善などがあった。

しかし私たちが訪問した際にはリサイクル施設は使われていない様子であった。セブで活動しているNPOの方の話によると焼却施設の焼却温度が低かったことにより「ダイオキシン」などの有害物質が発生し運用が停止したという。

⁵『フィリピン共和国 セブ市資源循環推進事業創出に関する普及・実証事業業務完了報告書』（2015）



JICA の報告書によるとダイオキシンの発生は防止できていたと書いてある。しかし私たちが訪問した際に運用されていなかったことを見ると何かしらのトラブルがあったと思われる。

イナヤワンの埋立地
(右の建物は JICA の焼却場跡)

②Polog (ポログ)

i . 地域概要

イナヤワンの埋立地が停止した後、今から 10 年ほど前にポログというセブ市から 1 時間ほど離れている Asian Energy Systems Corporation という会社の運営する民間埋立処分場にゴミが運び込まれるようになった。その後 2019 年の 4 月に事故が発生し作業員が死亡したことにより運用が停止していたが 7 月には再開している。取材を試みたが私有地であるため中に入っの取材はできなかった。

ii . インタビュー

ポログの balan ガイスタッフ同行のもと周辺住民にインタビューができた。この地域でもウェストピッカーとして生計を立てている住民が多かった。ゴミ捨て場があることによる影響として悪臭や水質の悪化、ゴミによって川がせき止められ洪水の危険性などをあげていた。しかしゴミ捨て場自体は作業員の雇用を生み出していること、ゴミを拾うことによる収入があるため必要であると話してくれた。

(3)渡航後の動き

渡航後に T シャツのデザイナーを募集し見つけることができた。現在 T シャツに貼る写真を決定してデザイナーに送っている段階である。また、販売はオンラインで行っていく予定である。

【今後の企画内容】

11月23日(土)一橋大学の学祭にて FEST として出展する。企画は「QRコードカフェ ～あなたにスキャンされるのを待っています～」という名前で行う予定である。その際に国内フォトワーク事業部は今回作成予定の T シャツを試験的に展示することで、その入場者数やサイトの閲覧者数をデータ化し、12月中旬に開催予定である T シャツ展に活かす予定だ。

<開催日>

12月中旬予定

<開催場所候補>

- ・聖心女子大学
- ・Impact HUB TOKYO

<候補団体>

- ・ASANTE PROJECT
- ・NGO EST
- ・FIWC 関東委員会
- ・IVUSA
- ・HaLuz
- ・IVUSA

<広報>

イベントの開始1か月前から SNS を使用して広報を実施する。

<目標>

一橋祭での入場者数やサイトの閲覧者数を参考にして目標を設定する。

<効果測定>

アンケートは当日実施するものと後日実施するものに分けることにする。

- ・当日アンケート

T シャツ展そのものの反省点やきっかけ作りとして適切であったのか図るために実施する。

- ①どうやって知ったのか

→広報が適切であったか知るため

②T シャツ展の良かった点と悪かった点

→T シャツの写真やデザイン、展示方法が対象者に合っていたか知るため

・後日アンケート

対象者が行動に移したのかどうか図るため。

①社会問題に関する情報やニュースを検索したか

②社会問題に関するイベントに参加したか

6. 今後の展望

(1) 9 期での反省点

9 期国内フォトワーク事業部の反省点はあまり外部を交えたイベントを実行することができなかったことである。その理由として企画書を他団体に提出するスケジュール調節不足や直接企画の説明ができなかったことにより、企画のイメージがしづらく、またこちら側の熱意が伝わらなかったことが挙げられる。イベント自体を先送りにした要因は FEST が一つの団体でイベントを行うことが資金の調達の面で困難であったためである。5 団体で費用を出し合うことで展示場を借りることを前提として行っていたため、団体との協力ができなかった場合のプランを考えていなかったも反省点の一つである。

(2) 10 期での活動予定

10 期ではそれらの反省を生かし、PJ を企画するためにスケジュールを最初に立て、それが実際に可能なのかを吟味する、また、一つの案だけで PJ を動かすのではなく、他団体と協力することなど、できるかどうか分からない項目は別の案を出し企画が先送りにならないようにしたいと考えている。

PJ の内容は 10 期国内フォトワーク事業部のメンバーの半分以上が高校生ということもあり、大学生はもちろん高校生も巻き込んだものを作りたいと考えている。PJ の詳細は未定だが、スタディーツアーや国内でのワークショップなどのイベントを通して参加者の視野を広げ、国際問題、社会問題を考えるきっかけを作り実際に行動に移してもらう予定だ。

FEST ワード集

バランガイ (Barangay)

フィリピンの都市を構成する自治単位。また、首長（**キャプテン**）や職員が行政事務を行う役所のこと。日本の村や町にあたる。

シティオ (Sitio)

バランガイを構成するさらに小さい自治単位。現在 FEST が持つ支援地の通称である「ヴィラ」はシティオの名前から取っている。

チャペル (Chapel)

キリスト教の礼拝堂。多くのシティオが地域内にチャペルを所有しており、集会等に利用されている。

CCPO

Cebu City Police Office の略。主に新支援地選定において、候補地の安全性を確認する目的でバランガイごとの犯罪データを入手するために訪問する。立派な施設を擁しており、パスポート等の身分証明書を提示しないと入れない。

ニーズ

必要や要求の意。FEST では、住民の意思が最大限尊重された支援に取り組むために必ず「**ニーズ調査**」を行う。

デモリッション (Demolition)

主に新しい建物を立てるための意図的な建物の取り壊しや破壊のこと。土地を借りて家を建設し生活している人々に対し、土地の所有者（貸主）がデモリッションを宣告することは住民の強制退去を意味し、次の生活拠点を探して引っ越しをしなければならない。

アーバンプア (Urban Poor)

デモリッションを回避するため、借りている土地の購入をサポートする政府主体の支援制度のこと。



まず、政府下の機関である National Housing Authority が代金を立て替え、土地の所有者から土地を買収し、その後セブ市の公的機関である Urban Poor Office に土地の権利を譲渡する。住民は Urban Poor Office に対して 25 年間かけて毎月一定の金額を毎月支払う。この支払金額は土地の広さによって変動する。また、この支払いを開始した時点でデモリッションのリスクは消滅する。

地域のコミュニティーでまとめて支払いを行うケースが多いが、Urban Poor Office に申請し支払いを開始するためには多くの書類を提出する必要がある、それらにも多くの時間と費用がかかる。

ペソ (PHP)

フィリピン通貨の基本単位。15 世紀のスペインの銀貨がこの呼称を使用していたことからこの名称がついた。日本円に換算すると、1 ペソ=2.12 円 (2019 年 10 月現在)

サリサリストア

スナック菓子やジュース、石鹸やヘアトリートメントをはじめ様々な商品を取りそろえた売店。大通り、住宅地の一角など場所を問わず存在する。夕方には子どもたちがこづかいを片手にスナック菓子を買いに行く様子があちらこちらで見られる。

ビサヤ語

セブ島、レイテ島、ネグロス島、ボホール島などから構成されるビサヤ諸島で話される言語。FESTの支援地の住民はこのビサヤ語を母語とする。

タガログ語

フィリピンの主要な言語で、公用語であるフィリピン語の元となった。元来は現在の首都・マニラがあるルソン島を中心に使われていた。タガログ語が母語ではない支援地の子どもたちも学校で学んでいる。

ヘッドオブファミリー (Head of Family)

家長の意。

来期展望

FEST TOKYO は、私達の代で 10 期を迎えます。記念すべき 10 年目にメンバーとして在籍できることに、大きな誇りや喜びとともに責任感も感じております。

10 期の団体方針は、「メンバー間で協力し団体の規模を拡大させ、国際協力と向き合う」です。

10 期メンバーの大半は経験の浅い 1 年生や去年の秋から加入した 2 年生です。歴代の先輩方の努力に支えられ、苦勞しながらもなんとかここまで続けてくることが出来ました。そんな私達にも、ついに FEST TOKYO を背負うときがやってきました。

自分達を中心となる代へ移行するにあたり何が重要なのか。そう考えた際に真っ先に頭に浮かんだのは、メンバー間で協力することでした。10 期メンバーの経験や知識は、個人単位で考えれば十分なものは到底言えません。しかしその部分をメンバー同士で補い合うこと、これは私たちに出来ることであり行うべきことです。

渡航や日々の活動を通して仲を深め信頼し合えるようになった仲間とともに、もがきながらも最後まで走り続けたいと思います。そして自分達に足りない経験や知識といった部分には、メンバー間で協力するだけでなく、外部団体への訪問や 9 期をはじめとした OBOG の方々からの助言、文献からの情報収集等を通じて強化を目指していきます。

多くの苦勞や失敗を乗り越え、国際協力という興味深くも複雑な相手に向き合える集団を支える、そんな代表でありたいと思います。

最後になりますが、FEST をここまで存続させ、今でも尽力頂いている OBOG、9 期メンバーの皆様、本当にありがとうございます。今後も皆様のお力添え、宜しくお願い致します。

10 期代表 森田 渉吾

9 期が終わりました。

この一年間
本当に多くの方々にお世話になりました。

FEST の OB・OG
大学の教授の方々
学生、社会人問わず様々な団体の方々
皆様のご協力なくして、今の私たちはありません。

本当にありがとうございました。

そして
FEST が設立して 10 年目を迎えます。
その数字に見合うように

今後も
FEST TOKYO は
最良の国際協力を探究、実行、啓発
していきます。

これからも引き続き
応援の程宜しくお願い致します。

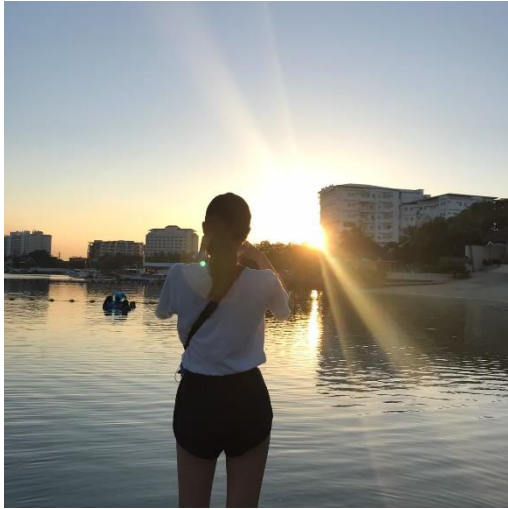
FEST TOKYO
9 期メンバー一同



SNAPSHOT BY FEST TOKYO









FEST TOKYO

9th ANNUAL REPORT



<https://www.ngofesttokyo.com>

YUNOSUKE AOTO

RIO BESSHO

MIKI MIYATA

TAKESHI YAMASHITA

SHUSUKE INADA

BANRI ENDO

MIKI SUMINO

TSUZUKI HARUMI

MAI HASHIGUCHI

SHOGO MORITA

RIKO KANAYAMA

KANON KAMIYAMA

MAYU TAKAYANAGI

SHION YAMANOKUCHI

KANO ONOSATO

TSUMUGI SAITO

